Mar. 1899
no. 483

明治三十二年三月十日

女學雜誌

第四百八十三號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第四百八十參號目次

◎社説
議院の收賄と家政

◎家庭
花園隨筆(紫琴女)
未見の父に對する一兒の觀念
兒童が説く反齒の効用
兒童の恐怖心
母の健康と育兒の成績
花園菜園の春
春眠の曉
前途の景氣如何
兒を失へる記(岩野泡鳴)

◎雜録
鬼面百相(其一)(有美狂生)
雪の歌(三論花影子)
嘆我ホーム(馨香女)
歌二首(池袋清風)

◎講義
老子女訓(下)

◎大磯だより
哄笑一番(細烟女史)

◎隨感
蘋の價値◎慷慨の價値◎立策の價値◎價値の價値

◎時事
博士森田久万人先生(青柳猛)
たより(馨泉女)

◎片々◎時報

社告

◎本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◎十日發行の分は稍や平易實際の記事を專にし、第一、家庭の整理改善に益あるべき事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女學宗教及び教育等に對する吾黨の卑見を陳述し、大に世上君子に問はんとするを旨とす。

◎單に十日發行の分のみ又は廿五日發行の分のみと指定して所望せらるるものあらば其の需めに應ずべし

●女學雜誌定價表●

前金	壹册定價 拾錢 半年分定價 壹圓拾錢 一年分定價 貳圓 (内國無郵税) 代金は總じて前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事 但し其節は總て一册十錢の割にて計算し追て請求可致事
廣告料	一行(廿十字詰)一回 前金拾錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引
送金	送金は東京駒込郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるる人は總べて一割増にて計算せられたし

明治三十二年三月九日印刷
明治三十二年三月十日發行
發行兼編輯人 巖本善治
印刷人 布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所 女學雜誌社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 株式會社秀英舍第一工場
(電話本局十九番)

巖本善治編

海舟餘波

海舟先生最近肖像(コロタイプ)及先生自筆草稿(吊山々岡鐵舟偈文)寫眞版入

定價一册三十錢 郵税金四錢

發賣元 東京神田區表神保町 東京堂

出版元 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十二年
三月十日發兌

第四百八拾三號

社説

議員の収賄と其家政

議院内の醜聞驚くべき程にて、世上の新聞紙に、日として其の記事の見へざる時なし。此は余りの事なれば、必竟、反對派が互ひに敵黨を陷いれんとする策に過ぎじ、所謂ゆる風を捕えて、針を棒にするの虚言なるべしと思ひ、左程、氣にも留めずしてありしに、現に院内にある人士より聞く所によれば、其實際は中々斯るものにあらず、「贊否投票の掛引すべて黄金の勢ほひにて、何事も詮ずる所、錢と云ふものに落ちざるはなし。たとひ三四正義の士ありとも、之を如何んともすると能はず、但だ茫然として手の着け樣なきを歎つ」と云へり。眞とに、淺ましき實况と云ふべし。

左らば、斯る議院は、前途如何に成り行くべきもの乎、其の改良の方はあるまじきやと掛念するは、世上志あるもの惣べての心配たるべきが、此の心配のある間は尚ほ生命あるとにて、少しは温たかみの存するものなり。更に進んで彌よ腐敗の極端に達すれば、人もあきれ果てゝ見向もせず、其の運正さに極まれりと云ふべし。此の最後に達せざれば、改革は中々出來ぬものにて、所云ゆる大廈の崩れんとするを木一本にて支ゆる如し、徒勞にして詮なきとなり。抑そも、議院政治は、當座の眞似にて、元々、根抵ある立案にあらず、一時西洋流にかぶれて、早速に取つくろひたる迄なれば、其の普請の輕薄にして、其取扱かひの不信切なるは、言ふ迄もなし。今更ら驚ろくにも足りぬとなれど、世上尚ほ慷慨の士あり、いつ迄も此儘に棄て置もすまじ。勢は極まつて亦た通ずるものなれば、何事によらず、閉口失望して、途方に暮るると云ふは腑甲斐なきと也。今の亂は、前の結果にて、今初めて出

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

來しとにあらず。左れば、今の結果に周章して、たゞ〳〵溜息ばかりつく中には、更に第二の原因をつくりて、他日今一段の悪結果を醸さん。人々、まさに眞面目の改良手段を講究し、たゞ慷慨絶叫するのみならず、實地に其手段を施こし、着々として、素因素養を、他の根抵に向つて打入れずんばある可らず。

故に、國家問題としては、之も進歩經驗の中の一段として、別に變ふるほどの事にもあらねど、扨て〳〵痛ましきは、彼の醜聞の主人公なり。左程に錢を欲しがるは、內證に切迫の事情ありて、背に腹を易えがたき秘密の存する故もあるべけれど、元々、名聞、出世、立身などに屈托して之を貪ぼる譯ならんに、目前現ナマの錢を握りて、之にて前途に祝福あるよう心得居る痴態こそ不憫此上なきとなれ。渇しては飲を擇ばずと大言したる、ヤクの人もあれど、遠からず下痢を起さんと必定なり。餓鬼の如く錢を求め、乞食の如く錢を求め、只だ錢々と貰ひあるき、其の錢の果して永持するとある乎。悪錢の身につかず、山師事の崩れ易きは、古來万人の經驗する所なるに、只だ一ト時の夢見んとて、節を賣り、名を落して、百年世路を踏外すとは、馬鹿々々しきとならずや。凡そ其の族の述懐にては、今時、錢の報酬なしに盡力するものはあらず、誰も若なり、誰も若なり、誰は表にこそ立派に飾れども內實は夫よりも甚だし、たゞ利巧に隱すと淡泊に顯わすとの相違に過ねば、吾は寧ろ正直にして男らしき方に就かんなど公言するものもあるべし。成程、友は類を以て集まり、目は同じ仲間に注ぎ易きものゆへ、斯る面々の眼中には、其同類の事のみ映り、世はすべて斯るものと觀ずるなるべし。之を不憫とは云ふ也。世は元と樣々にて、人は一人として同じもののなき程なれば、若し我に似たる都合よき實例のみを舉んとせば、其の類更に乏しきともあらじ。蛇の道はヘビの知る所ろ、泥棒のいり口は、ヌスットが一番に精はしきとゆへ、自分と同じ仲間の幾らかありてふとをもて辯護とするは、其見識の最早立升りがたき所以なり。同一の長屋にて壁一つを隔ててすら、此方に毒婦ありて、彼方に貞女あり。此の側に悪人ありて、お向ふに忠臣あるなどは、毎度の事にて、現に、同一の家根の下に住み、同じ腹を假りたる兄弟すら別々の人物となるにあらずや。左らば、人が賄賂を取るゆへに、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

我も取ると言はば、人が泥棒をする故に吾も試むべしと云ふか。何んぞ自から棄つることの甚しきや。

且又、悪銭は身の災にして、決して安楽は来さゞるもの也。喩えば、焼酎を飲む如し。一時に懐温たかく、陽気になるやふなれども、其のあとは寒くして且つ快ち悪るし。又々、焼酎を飲まざれば凌ぎがたけん。悪銭によつて一時の栄華を夢みるものは、真正長久の幸福なく、之によつて段々と一家の不幸を増すもの也。此は、二三年、二三人の経験を見ても、直ちに分ることなるに、其丈けの智識すらなきは、馬鹿と云はんか、腰抜と云はんか、幾分かは、白痴に近きものにて、真に憫れむべきもの也。

然し乍ら、相応に智恵分別もあり、就中、見栄坊にて、人前、門戸を張るものが、其の活計の維持の為に、止むを得ず、ソット此の悪銭の水を飲まんとすることあり。其の恐々ながら之に近づくの躰、如何にも気の毒なり。此輩は、尚ほ良心を存し、廉恥の心がけもあり、収賄の評判起たば、赤面する位ひの道徳はあることゆへ、何卒、之を引留めて過ちに陥いらせず、其の覚悟に支柱を立て、其心掛に心張棒をかいて、其の品行を盛り育てたきもの也。之に就て大関係あり、大勢力あるは、即はち、其の家庭にして、就中、其主婦なり。

主婦にして、分相応と云ふことに安んじ、浮きたる活計を承知せず、一時の収入にて、暮しを高めず、自身の身の廻りは勿論、子供の晴着に至る迄、決して流行に趨らず。名士としての良人の貴きは、家に質素なる妻子ありて、潔よきことに能く財を散するにあることを覚悟し、暮しを引つめて、交際を手重にし、富によりて信用を得ず、節操によりて名を挙るよふに心得、良人一時の所得に目もくれず、又、一時の貧乏に驚ろきもせぬよふに内助することあらば、如何に当代薄弱の男子なりとも、罪に陥いるの場合は大抵消滅すべし。凡そ幇間が家に帰りて威張らんとするに同じく、心弱き男子ほど、切めて家内にて妻子の前に殿様風を吹かせんとするもの也。之よりして、収入の増したるように見せかけて、我身の甲斐処あることを誇り、一時着物でも買入れてチヤ〳〵風を高くせんとする位の野心はあるもの也。賢夫人たるもの、能く此の弱点を察知し、此般訳もなき虚飾を退ぞけ、断じて浮たる幸楽を誇りにせしむ可らず。斯あらば、幾分かは、今の男子の不節義を

監護するとも出來べき歟。

然し乍ら、斯る虛飾を試ろむる男子は、閨閥に賴よりたる意氣地なしに多く、又、斯る虛飾を喜こび、もしくは、其の虛飾に欺むかれ易きものも、閨閥出身の婦人に多し。閨閥の余弊は、其良人をして收賄にすら近づき易からしむる也。もし夫れ糟糠の妻、辛酸を共にし、十年志を立てゝ、邦家に酬い、一片の丹心を相許して、終生の幸福を期圖せんものには、斯る虛僞も、失德もなし。人、何故に長年の樂を棄てゝ、一時の浮雲に乘らんとはするや。

『海舟餘波』發兌の辭

海舟先生在世の日、編者毎週其門に趨りて清話を聽き、歸つて直ちに筆記し、一々其眞面目を書留めたる者、今殆んど堆を成せり。蓋し世上大率れ幕臣の勝安房守を傳えて、偏えに其功を贊す、素より忘れ可ならざるに非ずと雖も、先生苦心の存する所、寧ろ其幕府を明渡すにあらずして、反て明治新政府の維持建設にあり。但夫れ先生能く形跡を沒し、功名を讓り、巧に韜晦して擾々の評を避くるの故に、當代多く之を知らざる耳。今や先生一去して亦之を秘するの要なし。此書、主として此般の消息を傳ふ。坊間既に一二の著書あり、略ぼ其梗概を言へる者の如きは、此等皆省き、凡そ先生の事業言論にして未曾て世に出でず未曾て世の思到せざる者を輯收す。悉皆編者親しく聞く所にして、毫も他子の文を加えざる也。又別に先生の寫眞を添ゆ。是れ最近の撮影に係り、コロタイプによつて製作す、銅版鉛版をもて比す可らず。眞采歷々、光彩燗さして面あたり接するが如し。又先生修辭の文稿一篇を寫眞版に附し併て添ゆ。是昔し山岡鐵舟長逝するの日、先生自ら偈を作て弔する者、其辭悲痛、逢人知巳を惜むの情、流露澎湃す。今ま斧削の痕一點々觀るべく、眞に一代の珍なり。如今販成り正に發賣す。同好の士希くは一讀を賜へ。（定價卅錢郵税四錢。郵券代用卅七錢。）女學雜誌社

家庭

花園菜圃の春

心世話しければ何事も世話しく、心靜かなれば何事も靜かなり。事は心の影にして、心のまゝに隨つて繁閑あり。必らずしも爲す業の多き少なきをのみ言ふとかは。

例せば、花を觀ると云ふ一事について惟んみよ。年々、花は咲けども、眞とに善く花を觀るもの幾人ぞ。花を觀ざるにはあらねど、心に余裕ありて、花として觀賞するの暇まなきのみ。今年こそと言ひつゝ、其年は空しく過ぎ、來年こそは是非にと言ひつゝ、亦其年にも用意のなきなど、凡そ人の通病ならずや。

眞との心得は全たく之と反す。もし忙わしければ、其の忙わしき間に余裕を存す。此の余裕の樂しみと、利益とは、驚ろくべきほどのものなり。俗に『先づ一服』と云ふとあり。忙殺、悶殺の間に、一服の忘れ草を喫する樂しみは、人に言ひが

たきほどなりと說くものあり。左もありなんと想像せらるゝなり。

則はち、吾人が斷ば本誌の讀者に注意する所ろのものは、一家數畝の間地なきはあらねば、玆に何なりと思ひ〳〵の種を播き、流しの水、はきだめの芥を活用して、苗より葉、葉より花、花より實、實より種と、層々段々の掛念をこめ、以て言ひがたきの樂しみを味はへよとの事これ也。其の手數は些細の事にて、日每々々に變りゆく樂しみは、言語の能く盡す所にあらず、何ものにても、心にかけて育つるときは、吾が愛兒の如くなるべし。はへば立て、立てば步めの心地して、無情の草花竹木も、日に〳〵愛慕を增すと熾んなり。何んぞ此の悅こびを度外に措いて顧みざるや。

凡そ、農耕作圃の事は、氣長きよふにて又油斷の出來ぬものなり。もし時季に到りて之を後らすときは、半年も一年も亦再會しがたし。浮かとして過せば、時節空しく去り、復たび爲んよふもなし。今や、陽春の氣地中に動き、万物悉皆躍らんとす。播種の用意寸刻も忽諸にすべからざるの時なり。主婦たり、令孃たる人々、心して其の準備あれな。

春眠のあかつき

春のねむり、曉を覺えず。眞とに寢心地よき床の內に、鳥雀の聲を聞かず。東天三竿の上にのぼりて、高樓の戶未だ開かれざるこそ、近頃のゆるみなれ。而して、長く眠り豊かに休むの利益如何んと云ふに、身躰之が爲に快復し、一新爽然たるの心地するにもあらず。半睡半醒の夢、腦裏に幻となり、起きて、四肢のだるきを覺ゆ。日光燦たり、梅花白く笑ふに對して、只だ何となく恥かしき感じのするのみなり。

夫れ、秋の木の葉もがるる如くに落ち行き、日足いよ〳〵短かく、鴻雁空に飛び、虫それ〳〵の穴に隱るる比となれば、人の心も自づと引しまり、肅然として來し方、ゆく末を思ひて、回顧反省の奮發心も起るとなれど、春と云ひて天地陽然我を歡迎するの時節となり來れば、人は至つて緩慢として油斷の情を生ず。

夫れ、木に花さく時のある如く、人にも必らず花さく時あり。たとひ如何なる醜女といへども、出花の時のある如く、如何なる醜男子といへども、一度は人に思はるるとあり。之と

等しく、如何に不運にして、如何に逆境に長居せしものなりとも、必らずや一陽來復して、其運の花の開く時節あり。之を其の人の春とは云ふ也。其人もし此の春に於て油斷せず、花多ければ、少しは摘み去り、以て堅實なる實子を結ばしむるとを工夫せば、其の一代と、其の子孫との計は必らず出來べき筈なり。此は殆んど天命とも云ふべき程に確定せしものながら、人は春景色となりゆけば、次第に心ゆるみ、此の春いつ迄もつゞくものと誤解して、遂に何等の締りも覺悟もなく、其うちに花落ちて、初めて愁歎し、又々、秋となり、冬となりゆくものの多きとなり。

嗚呼、春眠の心地よきは、何人も然り。されど若し眠りに安んじて、日光を空しくし、種を播かず、花を保護せずして、徒らに、其日を過さば、前途の邪知るべき耳。凡そ、人は逆境に破れずして、順境に破れ、冬に怠けずして、春に怠たる。志あるものの油斷せざる所ろ也。左れば、褥を蹴起して立て。天地の氣分宜しく、其のにこやかなるを濫用する莫れ。此の春、我が春と覺悟して、尤とも耕作に忙はしき時と觀念すべし。

前途の景氣奈何

物の直段夥たゞしく下り、金の直打隨がつて上り、暮し向、大分樂になりぬ。然し乍ら、世の不景氣は毫しも直らず。商人の苦しみなどは、近年になき程なり。况してや、地租增加せられ、引つゞいで地方税も增加せられんとす。田舍の不景氣は之よりや增すべし。前途は決して油斷の出來ぬやうに思ふものもあり、否、少しは之より回復すらんと信ずる人もあり。何れか果して正當なる。

物の正道より言わば、近頃ろ、世の紳商連が色々に工夫する景氣快復策の如きは、必竟、一時の附景氣なり。之によつて國の富を眞とに增すにもあらねど、元來、近頃ろ不景氣となりしと云ふ其前の好景氣なるものも、必竟はかゝる附景氣にて、もと／＼確實なる商道の發揮せしにあらざりき。凡そ、小僧の時より商賣に慣れたるもの、もしくは、數代引續き商業を營むものなどは、其考もヂミチにして、身を處する仲々勤儉なるものなれど、中年思ひ立ちて商界に飛込み、幸ひ一時の廻り合せにて、急に巨萬の富を造りたるとなどある族は、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

商業を見ると兎角に投機風にて、たゞ景氣によつて利殖せんとのみ思ふ僻あり。維新後、士族の商法、書生の商法、入札屋の商法、官省出入の商法など、俄かに勃興し、商賣と投機とを混同し、山師と紳商とを同一に見、株が上れば國の富は增したるものゝよふに認ためたる者滔々として是れ也。左れば、此の前、景氣好き時の景氣なるものも、言わば此類の附景氣なれば、今回、鐵道國有、外資輸入などの投機にて、再たび前同樣の附景氣を回復し、もつて所謂ゆる好景氣の現象を呈するとのあらんは、必らずや無しとも言わず。否な、多分は、本年夏頃よりして次第に其の趣きを呈せんと、十に八九は確かなり。

然し乍ら、此の附景氣に氣迷ひして、浮かと心を許し、又々年中豐年の心にて狂ひ出さんものこそ、他日再たび二三年以來に經過せし逆境に遭遇するものなれ。世は走馬燈にして、人は人形の如し。同じとを繰返して、十年目に元へ〱と反り、而して世は進歩せり吾も進歩せりと言ふとを得る乎。左れば、目下少しは好景氣の方に向ひつゝありとも、之を以て眞正永久の好景氣と思ふ勿れ。凡そ、油斷せず、僥倖を賴まず、怠たらず、奢らず、分を守つて只だ勉强さへすれば、景氣不景氣は、たゞ晝夜の如く晴雨の如きものにて、左して氣にかけべきほどのものにあらず。自から守つて用心さへすれば、二年三年の逆境にて當惑はすまじき也。

故に、目今、物價が下りしとて、此儘にて、何日迄も續くと思ふ可らず。前年、今の直段の倍もせし時すら、カツ〱暮せしとゆへ、今日尙ほ其の心得にて、氣をゆるしさへせずば、幾分の殘金を生ずる筈なり。此の殘金を無きものに見て、他日の爲に貯蓄せば、他日再たび物價大騰貴の時に際會しても、あわてるとはなかるべし。物價下りて先づ宜しと思ひて安心すれば、其の安心にて忽まち入用は殖え、去年去々年の暮しの時と左して變りもなく、矢張り同一の不自由なるべし。吾讎は吾が氣を許すの時に來る。安心する其時に、敵の間者は既に入込みたりと思へ。方今、主婦たるもの、決して油斷す可らず、矢張り物價高直の時の覺悟にて生計を爲すべし。左すれば、之より後の景氣の善悪如何など云へる問題は無用となるべし。之を確かなる答となす。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

花園隨筆

◎未見の父に對する一兒の觀念

古在紫琴女

物心覺えてより、今茲五歳餘に至るまで、父といふもの、味知らぬは、假が一人子某なり。其は彼生後一年有餘にして、彼が父君は、海外遊學の途に上り玉ひたるまゝ、今も彼地に留まり玉へばなり。故に假は彼が漸くもの心覺え初めし頃より注意して、豫め未見の父君を、彼が腦裡に紹介し置べく力めたり。第一には父君の存在を覺知せしむる事、第二には其外遊は研學の爲なりといへる事、第三には父君の遠方には在らせらるゝも、絕えず彼を思ひ玉へりといへる事、中にも第三の條件に關しては、殊に力を用ひたり。其は世上に往々見る所の育兒上の弊害中、彼里子などいへるものに遣られたる子の、幾年后實父母の手に歸する事あるも、繼子根性に似たる隔て心てふものを有するが免れ難き例なるを思ひ、幾年后初めて父君に接せむ我兒の、夫れにも似たらむ性情に陷らむかを恐れてなり。勿論我兒の如きは。彼里子に遣られたるものとは、其境涯の大に異なるあり。かゝる掛念は、甚杞憂に屬するやうにはあれど、生后六七年にして、初めて父君に接すべき運命が、既に尋常家庭にはあり得まじき事なるを以て、其際に至り餘り急劇なる愛の刺擊に驚愕し、愛情の發作其自然を失ひ、或は積極に過ぎて、埒外に逸する事あるまじきや、將た消極に流れて、忸怩たるに終らむ乎。何れ一方に傾かでは叶はぬ筈の感情が、其當座の習ひ性となるまじきや、是一の疑問なればなり。

况して何日迄も一人子ならむには、良し二者其一方に傾きたりとても、漸次の回復難きに非ず。されど若し弟妹などいふもの、生れむには、父君に對する愛情の發作に於て、通常の順路を辷らざりし、彼と是との間に何等かの相異を來す事あるまじきや、是も亦附帶の掛念なるをや。依て假は夙くより、父君てふ言の葉を、此方より繰返して、聞かせ置く事となし、或時は彼方より來りしお手紙を一々に示して、坊の事が斯くく書てあるとか、何角につけて眼に見ぬ父君の存在と愛情を腦裡に印せしむ可くと力めたり。而して彼が、最も心を動かす可しと思惟する玩具を發見したる時に於ては、敢て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼を僞るとにはあらねど、其僞たるを永久に覺知せざらしむ可き注意を以て、彼が知らざる間に是を調へ置く事となし、父君より坊に遣されたるものなりとの名の下に、尠くも月一回は是を與ふる事となし置たり（然るに彼は或時突如として問て曰く、お父さんは〇〇へ玩具を買ひに行てござるのかと。儂は此奇聞に對し、赧然たるものあり、其後は餘り此方法を、頻繁ならぬほどに控えたり）其影響かあらぬか、其始めは父上てふ名詞に、さして心を動かさゞりし彼は、漸次年月の成長にも依るべけれど、三歳七ヶ月の頃よりして、不圖父上のお寫眞を見せよと請求するやうになりたり。而して其請求は、漸次頻繁となり、后には日に幾回といふを知らず。如何するやと見てあれば、あるだけを乞ひ得て、幾葉も〳〵陳列し、小さき掌をつかへて、彼と是とを見競べては、頁久く宛熟視するが、日毎遊戲の日課ともなり居たる程なりき尤請求の誘引と思惟せらるゝ媒介は、其前一月彼が父君と共に彼地に在りし某氏の歸朝せられて、我家を訪問し玉へる時、彼は父君の消息に關する某氏の談話を、さながら奇異に打たれたらむ顏にて傾聽し居たりし一事なり。（其前一年同様の機會はありしも、其時は何等の感をも動かさゞりし）而して彼が此任意の日課に對する熱心の態度は、漸く加はり來りつゝ、爾后の數月間は、全く父君のお寫眞を、自己の專有物とはなし了りたり。假令ば初期には、出して下されといひ、預つて下されとて、祖母君ならずば儂の手に返納を怠らざりものが、何時しかに、其返納を肯んぜず。自己の自由に出納し得べき私有の玩具箱に、常備すべく迫り來り、主客轉動の結果は、却て祖母君より彼へ時々の借用を申込玉ふまでの、狀況とはなり行たりき。此間の初期に於て、我は試に、何故さは父君のお寫眞を愛するやと問ひたりしに、其時の答は、お顏が長い故といふにありき。（一面よりいへば其當時は最熾んに畵筆を弄する時期なりき）而も後期に在りては、單にお父さんゆゑ好きなりとの答には變り行たりき。兎も角其熱心の態度にこそ、一進一退の增減はあれ、前後を通じて、六ヶ月許は、父君のお寫眞を二日以上遺忘したる事なかりしなり。さるを如何はしけむ、最近の一年ほどは、全く個を忘れたる樣子にて、何時しか自己の玩具箱より、回收されたるにも心付かず。父君とか、寫眞とか、多少聯感を惹起す可き言詞に接するも、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

敢てお寫眞を求むる事、なきやうになり行たり（是ら諧筆を弄する氣焔比較的衰退せしが、此一年間同時に相前後して顯はれし現象なれば、諧と寫眞とは、多少相互相因緣せるものなるらし）されど寫眞時代に在りては、父上のお寫眞をと呼ぶ詞の、父上といふよりは、寧ろ寫眞といふに意味あるらしき疑ありしが、近來は否らず。時々父上云々と發語する彼の詞は、多少父てふ意義を解し得、彷彿として自己の父君に想及せるものらしく思はれたり。故に僕は幾分心情の發達を見し事と喜び居たり。然るに去月中の事なりし、彼は突然僕に問ふて曰く、我父上は如何なるお顏の人なるやと。折悪敷も多忙中、僕は答も簡短に、やがてお歸りになれば分る。彼は少し沈思しつ、若しお父樣のお顏が氣に入らねば、どうし升うと。餘りの奇問に、多忙を忘れ、僕は彼の顏を見てありしに、彼は臆せずいひけらく、若し坊の好きなお顏であるならば、お父樣にし升るが、嫌な顏なら、お父樣にはし升せぬと。天外より落ち來りし奇想に、一家はどつと笑ひどよめきぬ。僕は笑ひを忍びつゝ、彼が眞面目に對する眞面目にて、斯は心配に及ばぬ事なり、そなたが好きなお顏の長さは受合ふゆゑと、彼が久しく忘れたりしお寫眞をとり出て、此方ならばお父樣にするとの甘諾を得たりしは、如何ばかりの滑稽ぞや。あはれ彼は未だ父子の關係を意識する程の、年齢には達し居らざりしなり。さるを僕は大人の心を以て幼兒の心を推し、一々に理屈を付けて、彼が一擧一動を解釋し、速斷せし事の可笑さよ。我ながら、此數年間父君てふものゝ解釋に力を盡しける事の、いか許徒勞多かりしかを思へば、小供心といふものは、實にも忖度し難きものなりかし。

◎兒童が説く反齒の効用

我兒の義經好きなるは、前にも既にいへりし如し。彼四歳十ケ月の時問ひけらく、繪書にての義經樣は坊知れり。されど眞實の義經樣は、如何なる顏の人なりしやと。さなり僕もよくは知らねども、たしか小柄に、色白く、稍反齒の人なりしとものゝ本に見えたるやう覺ゆといひたりしが、不圖往年の失策を思ひ出で、彼が氣色如何と危みたり。されど彼は往年の如くには腹立たず。纔に默考したりしが、反齒といふは、齒の横に生えたる人なりやと。僕は多少の遠慮を以て、横

とゐふほどにはあらぬも、少しく前に突き出たるの齒なりといひしに、彼は忽ち會得せるさまにて、さらば○○の叔父さんの如き齒かと。あはれや是も現在の人としては、彼が好きの第一に指を屈する、血族の叔父様なるを如何はせむ。僕は氣の毒さの念に堪へず、何とて斯くも二人まで、坊が好きなる方の、反齒にはありけるよと、慰問的にからかひたりしに、彼も二者の一致に、愕然として心を奪はれたりけむ。何日もならば、些少の批難も許さぬに、此時ばかりは、斯くても腹立しき様子はなくて、大聲に反齒は好きと叫びたり。さらば、單に反齒が好きなりや、夫共義經様と叔父様の反齒ばかりがよきやといひしに、誰のなりとも、反齒は好き！と答へたり。さらば反齒は美麗しきかと追究せしに、あらず、物を喰べる時によろしといへるが此一段の落なりき。

◎兒童の恐怖心

狐狸妖怪などに對する兒童の恐怖心は、大人の教ふるなりとは、一般に知れ渡りたる事なり。依て僕は最初より、我兒に對し、決して妖怪を說きたる事なし。故に彼は暗夜と雖も、恐怖すべき所以のものを知らず、燭をさへ與ふれば、何時にても獨りにて、厠に上るが習ひなり。此習慣は夙くより、斷乎として試みたればか、たま／＼隣兒の、來りて狐狸を說くものあるも、先入主となりし彼は、我詞を口移しに、其妄誕を嘲るのみ。兒童間の妖怪談には、絶て心を動かす事はなかりしなり。然るに、今年一月或人の來りて、兼てより我避けに避けたる、羅生門の綱、大江山の頼光を彼に說き聞かせたるあり。其は彼が最も心を動かす可き、歷史談と、武將談によりて、鬼なるものゝ始めて紹介せられし事なれば、彼の驚怪一方ならず。何故我母は、かゝる奇異談を坊に說き玉はざりしやといはぬばかりの顔色を以て、我方を顧みき。依て僕は其人の座を去るを待兼て、彼人のいひ玉へる鬼といふは、きつと鬼といふものあるにはあらず。人の獰猛なるを、鬼とは假稱せるなりとて、其を取消さむと試みたれど、兒童仲間の幼稚なる狐狸談を、取消すほどの即効は擧り難くて、ほとほと是に困じたりき。是一つには、彼が友人たる、兒童と僕との比較には、母たる僕を以て物識りと信ずるより、容易に僕の取消を、受容する事にはあれど、此羅生門大江山を語りた

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

るの人は、生憎にも、母たる僕よりは、年長者の、而も物識との信認を彼が下し居たるの人なりしを以て、我取消は毫も其効を奏する事なかりしなり。故に其日の夜に限りては、いつも〳〵絶て恐怖心なき彼に似ず、獨りにて厠に上らむは、稍不安心らしきさまにて、躊躇せるを認めたりしかば、此所ぞ習慣の一變を來すべき機會ぞとて、僕は詞を勵ましつゝ、翌夜はあれ、今宵ばかりは、如何にしても、此母樣同行すまじきぞ。大將にも成らむと心掛るものが、さる事にては、何とかすると皷舞せしに。彼は其樣子につと歩み出で、例の如く獨行したり。翌夜よりは、例に復して、今に至るも、再度の躊躇を見ず。効果ありしを喜ぶにつけても、妖怪魔鬼を語る事の、如何に、兒童の恐怖心を誘ふものなるやに驚きたり。何は兎もあれ我兒は、這般の注意の下に此種の恐怖心は免れたれど、意外の邊に、一種の恐怖心を、知らず〳〵も養成せらるゝ事となりしが、其は病氣に對する過慮は、一種の恐怖心となりし事是なり。僕は僕に一の痼疾あり、今に至る幾年を、病院通ひてのみ過し居る事なれば、屢彼處に伴はるゝ彼は、なべての兒童に比して、病人を見る事多く、病氣てふ觀念の往來を免

れざるなり。加之ならず、僕自身が痼疾ある身の常として、充分に其傾きある事にしあれば、其感化の彼に及べるは、洵に致方なき事なり。一聲咳けば、ヂフテリアに非ずやと氣遣ひ、二回下痢すれば、赤痢には非ずやと恐るゝなど、兒童にあるまじき過慮は、全く僕の病的過慮に習ひたる事と思へば、育兒に要する注意の數に、迚も思念の及ばぬ事と、空恐ろしくも、罪深き心地するなり。

◎母の健康と育兒の成績

病氣にても差支へなしといふ人間は、天上天下一人もなき事なれど、母として育兒の責を負へるものは、一人の健不健、兒女の運命にも關はる事なれば、殊に其健康の保全に留意す可き事なり。何事に拘らず、事を遂ぐるの惟一資本は、健全なる身躰を要するは今更言を竢たず。故に母として、眞に育兒の責に任ぜむとならば、實に健全の身躰を要す。身躰健全ならずは、如何に可愛の子の撫育法に注意せむと思ふも、健康の精神に伴はぬものあり。動作懶く、發言煩はしき爲め、知りつゝも等閑に看過するの止むなき場合にも陷るものなり。

儂は經驗上、眞に這般の遺憾多し。當初の考にては、幼稚園とてもなき土地柄、到底彼が好友を撰擇し得べくもあらず。故におのれ彼が好伴侶となり、母として、又友として、幾年を夫れにのみ献身せばやと思の外、病魔は漸く加はり來りて、ほと／＼懶さに堪えず。戶外の遊戯には伴侶となり得るの氣力疾くに消耗せしぞ遺憾なる。返す／＼も望ましきは健康なる母君の世に多く、健全の躰質と、精神を遺傳し玉ひ、生後は假令他の家事を、人手に托する事はあれ、子女の敎養伴侶には、飽く迄自身其衝に當り玉ひ、母の手と眼を離るゝ時間の、成る可く少きやうにと力め玉ひたきものなり。他の家事を、他人に托せし失敗は、多く金錢の損失に歸着すべき問題なり。されど育兒上の失敗は、人間を損失するの問題なるを思ひ玉はゞ、如何に繁雜なる家庭の母君とても、身躰健康なる限りは、よも等閑に付し玉はじと思へるも、臭きもの身知らずにも似たる病者の遁辭かとうしろめたし。

機先一喝鐵圍扇　一休

兒を失へる記

岩野泡鳴

一月十三日　雨　小兒病氣の氣味ありとて、昨夕醫師のもとへ見せに行かしめしに、まさか實布垤里亞には非らざるべし、之を飮ませて、明日午前九時頃再び來れと、水藥一瓶を異れたり。當夜は常よりも早く床に就きしが、小兒一睡の後、何となく氣息切迫して、腹の底より無理に呼吸するものゝ如しあはれと思ひて顏を近よすれば、却て拂ひのけ、寐返りしては枕もとなる小ランプをつかまんとす。時には身づから飛び起ると屢々なり。母之を休ませんとて、或は背負ひ、或は寐かしつくるに、又起上りて便を呼ぶ。而して別に出づるにはあらざるなり。苦しかりし爲めならん。時には又湯といふ。湯あらざれば水を與ふるに、いゝ、おべたいねといひながら、舌うちして之を飮むと二三杯に至る。喉には始終たんの溜れる樣子なり。時々嘔氣を催し、吐きさうになれど、身づから之を飮み込みて出さず。一度は大に吐きけれども、藥のきゝめとのみ思ひ居たり（醫者吐くとあらんといひければなり）。たゞ

早く夜の明くるを待つばかりなり。

六時頃に至り、人の起き出でしを見て、おのれも起る氣になりてか、衣物を呼ぶ。その際咽喉にせかれてしかと聽えず。衣物を着かへさせしに、そのまゝ蒲團の上にうつ臥して眠れる樣子なりしかば、その上に又小さき蒲團を被ぶせ置きしに、われらの食事を終る時、母を呼ぶ樣なれば、つれ來りて、いつもの牛乳を與へんとしけるに、さじ一杯を飲みて再び口をつけず。喉の痛めると尙其時も氣つかざりしが、兎に角からだの弱りて、かほ色少し變じ居るを見たり。母之を負ひて、此度は專門の小兒科に行きければ、われはその歸りを待ち居りしに、六時間餘を經れど歸り來たらず。十二時を過ぐる頃、妹來りて〇〇子の病院に入りしを報ず。差して行きし先にはことわられて、北里の研究所に行きしなり。直に入院して之が診斷を乞ひしに、既に八分通り見込なしといへりと。三ケ處に注射を行ひしもその効驗見えず。入院後、半時程經て、終に果なくなりぬ。われ至りし時は未だ體溫は殘り居りしも、その色既に變じ居たり。今はの際には別に苦しみし樣子見えず。昨夜よりの苦みに勞れてなるべし。急性實布垤里亞にして、心臟痳痺の爲めに息絕えしなり。われより先、祖父の至りし時既に之を覺えず、それより後何をいふとも聽えし樣子なかりしが、最期にとッちやんといひ聽かせし時、三角の口つきして笑ひしといふ。享年二年二ケ月。

傳染病なれば、死骸をつれ歸ると能はず。そのまゝ死亡屆、棺桶取寄せ、二十四時以內火葬の許可、等の手續を了し、午後八時頃二人の人足にかつがせて、病院を出づ。祖父と母とは途にて別れ、われ一人つき添ひて、目黑附近の桐ケ谷の火葬場に向ふ。九時過ごゝに着し、火葬室の錠と鍵とを得て、人夫の棺をかつぎ入りし堂內に入る。折しも大雨降り來りて、ぶりきの家根を打つと霰の如し。われは死神の下り來りて、恰もわが兒の靈を受け玉ふかと思ひつ。

當夜は乞ひて同處の茶屋に一泊し、明朝早く遺骨を受取りて歸るとす。茶屋は客の來るに備ふとて、十時迄戶を閉ぢず。かたはらなる人夫の休息所に、燃え殘りの火も既に全く消え果てしやうなり。山中の一軒家、寂として毫も世間の聲を聽かず。夜風林樹に吹き渡りて、人の心を空うす。これ悲歎の湧出すべき時にして、而して殆ど之を感ぜざりしは、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

蓋し身躰疲勞の爲めなるか、將又、その實際に於て、未だ兒の死せしを想するいとまなきか。寐床に入りても、夢ともつかず、幻とも見えず、たゞうと〳〵としていつの間にか眠りけん。第一夢を結ぶ。小兒の苦しめるを抱きあげんとする時、そり返りたるに驚き覺めたり。これ既に明け方なりしと見え、起きて戸を開き見しに、うす明かりき。既にして又第二夢を結ぶ。この度は病院に在りて、小兒は母と共にわれを見送り、われ出口のしきゐをまたがんとする時、「あばよ」といふ聲うしろに聽えしかば、兒は未だ健全なりやと思ひて、覺めたり。既にして又第三夢を結ぶ。こは現在泊する茶屋の室にして、寐ねし時には、この家の人、此室は常にあけ置く處なれば、戸の外には障子の必要なりと話せしものを。今や立派なるがはまりゐるを、茶屋の男あけ居る驚きて、目さめたり。この音は即ちこの家の老人の、隣室に起き出でゝ、炭火をつくり、戸棚を開くなりけり。時に午前六時三十分。

十四日　晴　六時半に起き出でゝ、庭先なる手桶の氷を破りて、冷き水にて顔を洗ひ、直に拂ひを濟し、昨夜の鍵を携へて火葬堂に入り、兒の室をおんぼうに開かしむれば、人躰は

焼け通りて灰となり、頭蓋骨の如きは半ばその形のまゝに黒くなり居たり。長き竹箸以て、われその一二を備への壺に入るれば、あとはおんぼう之を棒の先にて碎きつゝ、入れぬ。われ之をハンケチにつゝみ、外套の裡に抱きて、こゝを去り、霜深き田舎道を通りて目黒に出で、滊車に乘じて澁谷に下り、某氏及び某氏を訪ふて、葬式の順序を定め、歸途青山墓地の茶屋に立寄り、墓場の穴堀りを依頼して、家に歸る。その時の感、恰も小兒の外にありて、未だ歸り來らざるが如し。

十五日　晴　亡兒の葬式を自宅に行ふ。某々氏之を司る。墓地はわが母の傍なり。遺骨と共に、兒の好み居りし羽根と、水くみと、坐せる形の裸人形とを埋めたり。花筒には、葬式の場に用ひし、梅と椿と水仙とをそのまゝに挿し置きつ、嗚呼、地下の一少女、靈となりて今や何處の追羽根を習らはんとする。

思ひきや下萌いそぐ若草を
野べの根になして見んとは　一茶

雑録

鬼面百相（其一）

有美狂生

《狂生の面づら鬼に似たり。之をしかめ之を伸れば、百相を現す。今暫く手帳に其影の一二を探らんか》

●喞筒を使用するに、之に迎ひ水といふをいるれば、忽にして、多量の水吸ひ上げられて出で來るとか。天才といふは、喞筒に似たるものにや。これに少しの智識を學びいるれば、無量無限の智慧、瞬く間に浮び來るなり。之をこそ、一を聞て、十を知るといふなれ。

●道徳の本源は、寧ろ醜美にあり。『悪し』とは醜きものゝこと、『善し』とは美はしきものにことならずや。

●佛蘭西語にて、宗敎のことを（Culte）キユウルトともいふ。これは、英語の（Culture）修養などいふ文字と其語源を同ふすべし。兎角宗敎の眼目は、修養なりと見えたり。

●自由黨が『憲政黨』の名を冒すを觀て、僞黨などゝ空叫びせるものもあれど、もし進歩黨の儕輩ども、自由黨の仲間を、ぬきにして、『憲政黨』の名を冒したらんには、これも又僞黨なるべし。その全體の一部たるに於ては、兩者共に相同じ。

●不折の畫は間口廣けれど奥行なく、爲山の畫は間口狹けれど奥行長し。不折の畫は小才子の猿智慧に似たれど、爲山の畫には禪味帶びたり。不折の筆は其うち種の切れて、少しかき續くれば、單調に流るべけれど、爲山は底を現はすこと、仲々に遅かるべし。我れは寧ろ爲山に肩もたんか。

●新婚者の尻をめくりあげて、棒にてなぐり叩き、或は之に水かくるなど、今なほ所々に行はると聞く。兎角結婚とは社會に呪はるべきもの、又嫉まるゝものと思はる。

●狐が人をだまさんとて來る時、人もし假にだまされたる仕打ちせば、狐は我が術あたれりと、頭に乘りて小躍りし、其心も緩むべければ、斯機に乘じて却て之を手取りにするを得とぞ。もし、人あり、己れを騙さんとて來らば、之を狐と心得て、暫くこれに騙され欺かれたる眞似すべし。却て其人を擒にして我が手のものとするを得ん。これぞ、虚々實々の法なん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

めれ。

●ビーチャルの廢奴演說こそ、眞の福音にて祖師の心なるべし。我邦傳道屋今時の說敎は、何の福音ぞ。これは辨證學の講義とて、古の笞刑の如く、人を打擲する術なり。

●羅馬天主敎の典禮神秘を、迷信無智と嘲れど、淸敎徒主義も又迷信無智なり。誰か烏の雌雄を知らん。

●新に妻を迎へて家を搆へたる人は、遠き旅より久しぶりにて、我が家に歸れる旅行家の如し。何となく心に落つきたるところ出できて、ゆるやかになるものぞと。されど、晝寢も亦これよりぞ始まる。

●詩歌のリズムは建築のシムメトリーなり。

◎大膽不敵の人は、物に當りて事を實行せしむるによけれど、之をして策を案ぜしむるは頗る危し。蓋し、自らに非ずんば到底行ふ能はざる計畧を出すべければなり、故にこの種の人は、戰士によろしく參謀によろしからず。

●小人閑居すれば不善をなす。茶屋女など、人數多くて暇あらんよりは、小數にて手不足なるほどこそよけれ。

●Fools rush in where angels fear to tread といふラテンの

諺あり「盲人蛇におぢず」と、よくも似たるもの哉。

●テニソン逝き、グラッドストーン逝き、ビスマーク逝て、世界の萬民、悉く仰で『あれは』と感歎するほどの名人、全く跡を絶ちて、第十九世紀の末は侏儒の丈くらべとなりたれど、もしそのうちに强て秀でたる世界の人物といふをもとめなば、露のトルストイと米のエヂソンと英のブースとならんか。

◎淺草六區に夜與業を許るせしは、藝人の衞生保護を忘れたることなり。殊に、歲まだうら若き玉乘の娘子など、慾に眼のなき親方に、晝夜の休みなく、つかひたてらるゝこと、可哀さうならずや。

●人生痛苦の源は、慾心あるにあり。人もし進步せんとするの慾さへなくば、春の心はのどけからまし。

◎今の世に骨肉相婚する時は、其子必ず痴弱なり。されど太古人少くして、親子相婚せざるべからざりし頃には、それにて健全の子孫ありたりと覺ゆ。然らば、天道にも進化なるものあるか。將たこは一時天道の例外なりしか。

◎人、戀ひするとき、先の人また我れに應じて戀ひせずば、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

その人は、心のうち窃に我れを蔑るものなりと知れ。

◉今日の道徳とは、希臘の神話なるメデユサの首の如きものにて、見る人をして、悉く冷き大理石の刻像たらしめずんばやまず。

◉進歩せざる國家は亦保守することを能はず。

◉ゲーテとはシエクスピヤにバイロンを加味せし人か。

◉餌で人を釣るは、詐術なりよろしからずといふ。されど餌なくては、魚はかゝらず。針ばかり水に垂れて見よ。

◉野にある草花は、さして益多きものにあらねど、野の美はしきは是れがためなり。美術女人などいふもの大したる効能もなかるべけれど、世に生き甲斐ありと思ふも、これあるがためなり。されど、我が家の庭のあざみの花より、外の花一切觀るべからずとならば、これも亦苦しからずや。

◉また婦人とは空氣中の窒素の如きものなり。これのみにては、何の効用もなく、却て、邪魔もの、人を惑はすもの、人を毒するものに過ぎねど、酸素の用を全くするには、欠くべからざるものなれ。かゝる用を無用の用といふ。

◉また婦人は、語學の人種にして數學の人種にあらず。經濟の思想さへ、凡俗の人の口するほど、綿密精到なるものに非ず。寧ろ一歩を男子に譲す。

◉人の思想とは振子の如きものにて、一方の極端より又他の極端に走るなり。中正を得ること仲々に難きはいふまでもなし。其力の消磨する時、振子の振りは始て止む。これ老年なり。

◉空間の法則と時間の法則とは常に相同じ。

◉空想は腦力の遊散花見なり。

◉よく、人に相談するといふことあり。こはたゞ自ら惑ふて、東せんか西せんかと、五里霧中のうちにある時にのみ、之をなすべし。既に自ら決して而して之を人に計るは、徒らに勇氣を薄らぎ、迷ひを起し、發端に「ケチ」をつくるに止る。

◉後家さんは、多く紅白粉などにて、厭やに洒れ、いやにめかすものと、相場の定れるが如し。これは、稍く受取悪き話なるも、別に怪むに足らず。夫に別れたるは、寂しけれど、是非なきことなれば、せめては世間の人々に見放なされず、これを杖と我身を便らんためなり。

◉英國民は意志の人、佛蘭西國民は感情の人、獨逸國民は、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

智識の人なり。

●英國民は意志の民なり。故に、批評の民ならずして、實行の民なり、獨創の民なり。尤も精到なる英文學史を著せるテイヌは佛人なり。されど世界の詩星は英國に聚れり。沙翁は世に稀れなるドラマを著したれど、之を尤も巧に批評せるは、獨逸人にしてシユレーゲルなり。自由貿易保護貿易をやかましく論ずるも獨逸人にて、英人はその間にドシ〳〵錢を利けつゝあり。

●爺婆の友は其子ならずして孫なり。大才能の人は凡俗を我が友とせずして、寧ろ却て鈍愚の輩を其仲間とす。

●小才子とは、銅の混ぜものある金銀の如し。是を道具に使ひ、器具に用ゆれば、至極の便利にて何事も細工ものには都合よけれど、其品位は至て賤し。

●哲學を詩的に謳けるはエマルソンにて、詩を哲學的に述べたるはベーコンなり。つまり、エマルソンは哲學を詩化し、ベーコンは詩を哲學化せる人といふを得んか。

●男子の聲は蟇の聲の如く、婦の聲は蛙の聲の如し。

●悪徒も人を説服するには義務をいふ。

●電氣學に感染電流といふものあり。人も金線の如きものにて、大人に接して受くる感激は、其始めて遇ひし時と、その人の死せし時とのみなり。第二の金線に感染電流の起るは、第一の金線に電氣の始めて通ぜられし時と、又停められし時となり。常は更になし。

●土地遞減法とは、經濟學の法則なれど、腦力にも又この法則の行はるゝと知らずや。語學など、始めのうちは覺えよけれど、追々と進歩の鈍くなること、是れ大腦遞減法とも名くべきか。

●婦とは、男の前には猫の如くなれど、同性の間には、仲々もツたいぶりて、あらをほぜり合つていぢめたがるものなり。其鼻風のおかしさよ。これは、田紳の金縁鰌髯に威張たがるも同じことにて、其無力無能を表白するものぞ。

●凡人の撙節は正直なれど、大才の撙節は僞善なり。

●ベーコンは福澤先生の稍々悪人にして、更に大に大なるものなり。

●深雪が阿曾次郎に遇ひし時は、すでに盲目にて其誰なるやを知らざりしも、唯似た人よと慕はしき心の起りて、再び尋

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ね行きしと、朝顔日記に見えたり。すべて我が戀人に似たる人は、何となく戀しく、時には一見胸のときめくこともあるものとぞ。

◉日本人種は傳奇的とも稱すべきか。

◉ロングフェローが作なるエヴァンヂェリンは『西洋朝顔日記』と譯名するを得ん。

◉婦人は男子に隷屬するもの故、教育を要せずといふものあれど、これ、帝王のみ教育せらるべく、臣民は暗愚にて可なりとの說に同じ。

◉政府は何事も放任主義なるがよし。生存競爭によりて、惡は自然に亡ぶべし。惡とは弱者のことなり。

◉貧民にて、稍く白痴眼を備へ運動の痙攣的ならざるは少し。

◉榮養の不良は白痴を生ず。

◉山は神の住家、谷は人の住家、水は魔魅の住家なり。

◉今の姫君達のうちには、其手にたこのよれる方々、仲々に多くおはしますべし。

◉天才も事情に接せざれば煥發せず。代數學にて無限大により零を乘じたればとて、いつも零なり。

◉ヂュリエットは愛する女なり。オフェリヤは愛せらるべき女なり。

◉圓熟闊發の士は、常に曖昧なるものなり。旗色鮮明、熱心真摯なるとは、まだ若き乳臭兒のことなり。

◉感情激昂の男子は、多く父に離れて母になつく。

◉東西の宗敎改革、皆な戀愛に基因す。ルーテル然り、親鸞然り。

◉グラッドストーンの偉大なりしは、保守の根底に立ちて、進歩主義を行ひしが故なり。

◉其始め、肉の我れを危難の間に救はんとして、宗敎起れり。而して、靈の我れを危難の間より救はんとするもの、これ今日の宗敎なり。之を宗敎の進化といふ。

◉茲に新詐僞法あり。そばの出前を持ち込み來るを見澄し居りて、後、何の氣なく擔夫の態に粧ひ、そのそば代と器具とを盗み去るなり。

◉建築は、音樂の氷れるものとぞ。

（まだある）

雪

三輪花影

木々のこずゑも　枯れはてゝ、
年のなごりと　散らしける、
垣根のおち葉　吹きまきし、
風もいつしか　しづまりて、
隣のおきな　まへの嫗、
こよひは雪に　なりなんと、
かたらふ聲も　さむげなり。

夕食に母や　いもうとが、
遊にゆきし　わらべらを
呼ぶ聲さへも　身にしみて、
くれゆく空の　光さへ、
もらさぬ雲の　色くらく、
雪はしづかに　降りそめぬ、
枯しこずゑに　花も咲き、

茅が軒にも　玉をしく。
いつこかざるも　おなじいろ、
まさりて淸き　ものあらじ。
人はかこちも　ほめもせん、
雪はしづかに　降りしきぬ。

梢も屋根も　野も山も、
たちまち深く　つもりしに、
降るを見るまに　消えうする、
池のうへこそ　はかなけれ、
はかなく水に　きゆれども
雪はしづかに　降りしきぬ。

枯木に花を　さかせしも、
軒にしら玉　しきたるも、
水に消しも　おなじ雪、
おもへば浮世　うらめしく、
われは闇路を　迷へども、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

（一七〇）

雪はしづかに　降りしきぬ。

雪はいよいよ　降りしきり、
今日ものこらず　くれにけり。
うらみなげきの　影もなき、
樂しき夢路　ゆく人も、
夢もかなしと　いとひつゝ、
眠れる人も　あるなれど、
雪はしづかに　ふりしきぬ。

夜あけてそこを　ながむれば、
山も林も　野も里も、
たかき御殿も　しづか屋も、
昨日ながめて　はかなみし、
池の水をも　いとふかく、
うづめてなほも　絶間なく、
雪はしづかに　降りしきぬ。

嘆我ホーム

馨泉女

渡り苦しき浮き世の中に我が唯一の樂天地と頼むは、温き我ホームのみなりき、實に我ホームのみなりき、されど我ホームは珠を炊き桂を焚く如き豪奢を極めざるは勿論なれども赤貧洗ふが如しと云ふ無一物の窮遇にも至らず、四五人の女世帶にて互に交誼の美しきこと姉妹の如く、母子の如く、師弟の如くなりき、春の始めにはさゝやかなる籠を手に携へ、若菜摘み集めて美ひたしもの何くれと料理し、かたみに主人顏してもてなすもいとおかしく、今日は君様がお客の番なり否々こなた様が、否君様かと讓りあひつゝ打ち興じ親しき中にも禮儀の垣を越えす、朝夕掃き清めたる八疊の間の床には形ばかりなれども四季折々の花を挿し、拭き潔めたる板間は鏡の如く、光澤の出るを自慢にかたみに丹精し、月皎き夕邊には世間話を種に薄茶を催し、隔てなき女子同志の心易さ、流石に浮世の外の心地こそすなれ、たまさかの日曜日に義理に迫られ、各々外出すれば分秒も早く我家にといそがれて飛

ぶが如き腕車も、もどかしく駈け込むやうに歸る門口より矢張どこより我家が一番、我家ほどよきものはなし、……とたまさかに出て友誼を温むる寸暇にもスウヰトホームの味を忘れ難く、日々の職務に勞れ、纖弱き脛撫でつゝ歸り來る夕暮れの空淋しからぬにはあらねど、ヌツト入る門口より漏る、我家の洋燈の光を見れば、終日の疲勞も拭ひし如くいつか失せて、我家の誰れ彼れの面貌は天女の如く思ハれ、互にホヽト笑む聲を聞くは、精妙なる音樂を聽くより樂しく、我樂みは唯此美しきホームにてありき、

さるに或る歳の春憐れなる我は此美しきホームを捨て旅路遙けき陸奥の某所に移り住まねばならぬことゝはなりぬ、涙を飲みて何氣なき態を裝ひ、打並びて寫したる眞影五六枚を、一枚づゝ分配て復逢ふまでの遺物にと云ひし翌日、皆散り〲に別れたり。嘆我ホーム嘆我スウヰイホームは此時限り他人の住居となれり。さて之に代りて我求め得たる我ホームは如何思ふも疎まし、あなむくつけし、以前の誰れ彼れに代りし暴々しき擧動の田舍娘、其心は素朴に愛す可く、親しむに足るも、我腦裏に寫し來りて、片時も忘れ難き過去にしスウヰトホームには似る可くもあらず、某の友が西京行きの土産にとて贈りたる清水燒の茶碗と、我秘藏の古今里燒の菓子鉢を情なくも微塵に碎きたるはおろか、黃銅製の金盥、うがひ茶碗さへ、二三度グワラ〲と放擲したる爲に內面に二三ケ所瘤を生して憫れなる姿となり、其他器具調度大低無難なるはなし、戶障子の開閉每に家內鳴り響きて、胸轟き人情紙の如き人の云ふなる何々を新しき疊とて賞贊されし備後表も、表代への翌日より取り墜したる炭火の爲に燒印斑に、見るもの聞くものハツと思はぬはなし、嘆我ながら狹き胸と、自ら嘲れども矢張、樂しからぬ念は改まらず、嘆我スウヰトホーム今はいづこに行きけん、憐れなる我は今は唯一のスウヰトホームを失ひぬ、懷しきは彼のホームのありし都の空なり、義務責任と云ふ重荷は每に我念慮を沈めて少しも動くことあらしめねど、休暇とか云ふもの來りて此重荷を取り除けば、我心は忽ち動き、我足は自ら步みてステーションに行くめり、草木も眠る夜半をも厭はず、肌を劈く寒風をも恐れず、百里の長途を僅に十二時間にて行くさへ、遲き心地にて、去る年の暮の休に積雪尺餘に及ひければ、或友止て云ふ、今宵

發足し給はり夜半に白河を過ぎ給ふらめ、彼處の寒さはいと堪へ難し、明日こそよけれど……さるに我は一首を殘して此友に送り、又もや其夜發足せり、むくつけきホームが我を止むる力なきまゝに、其時の歌に

懷しき都の空にいそがれて夜半のさむさめ白河のせき、

想ふても見られよ我敬愛なる姉妹諸氏よ、諸氏は此地上の總てのホームの女王におはさずや、諸氏が造り給ふ所のホームはいかに貴きものなる乎、此地上にあるとあらゆる我等人類をして、心に快絕と唱へ、樂土に遊ぶ心地ならしむるも、失意の苦境に陷らしむるも、力あるホームと爲すも、力なきホームと爲すも、皆諸氏の至誠の手腕によるのみ、勉め給へよ。

庭初霜　　池袋清風

散りつもる庭のもみぢのくれなゐに
　けさより白くおける霜かな。
冬きぬと綿いれぎぬはきたれども
　なほ袖さむしけさの初霜。

講義

老子女訓（下）

◉金玉滿レ堂、莫二之能守一。富貴而驕、自遺二其咎一。功成名遂身退、天之道。

金玉、堂に滿つれば之を能く守るは莫し。富貴にして而も奢るときは、自から其咎を遺すなり。功成り、名遂げては身退くを天の道とす。茲に、人あり、財貨珍寶を集め、金銀玉帛を蓄はへて頗ぶる得意らしく、藏に納め、棚に積み置くとも何んとなく物足らぬ心地して、ワザ／＼客間、應接間に陳列し、人に見せて誇り、羨やませて誇るやうなることをすれば、到底長持は出來ぬものなり。泥棒の這入ることもあるべく、欺かれて取らるゝこともあるべく、意張つた馱賃に呉ねばならぬこともあるべし。所詮、之を能く守ることは出來ぬものなり。富貴なりとて驕り高ぶる人は、いつ迄も人に賞めらるゝとの積くものと思ふならんが、其の驕ると同時に咎を遺傳することを

覺らず。人の悪しみ恨み次第に集まり來りつゝあり。子孫も、其の驕に慣れて、他日、家を破るべき卵を孵へしつゝあり。自分丈け高慢な顔をして、長く人の上に高ぶるとの出來るものと思ひつゝある其内に、知らず既に咎を後に遺しつゝありとは、憫れむべきとならずや。金玉あらば、深く藏めて人に見せぶらかさず、折々出して善き事に使ふべし。富貴ならば自から忝なく思ひて、世の不如意の人に愍れをかくべし、其嫉妬心を招くやうなる驕奢すべからず、之れ切めて其の幸福を長久にする所以なり。家を修むるもの此の秘義を知らず、金が出來れば、人に誇りたく、出世すれば、人に驕りたくなるゆゑ、他人が潰すにはあらず、自から潰し、自から亡ぼして、速かに其家を滅するなり。左れば、功成り名遂げて身退くを天の道とする所以を覺悟し、大凡そ、一つの功、一つの事が成就すれば、最早や隱居するものと心得るが肝要の事なり。姑が、此の家は自分の力で出來したもの故と高慢して、嫁が來ても意張り散し、娘が成人しても任せぬやうなれば、自分ばかり大層エラ相に高言すれども、陰で何人も服するものはあらず。折角、其家の元勳と自から免許しても、人は之を五月蠅がるのみにて、有がたがるものはあるまじ。一國の功臣すら矢張り同然にて、其の功が成ると同時に其のお役は濟みしものゆゑ、一旦、身退ぞかざる可らず。然るに、自分で、功臣なり元勳なりと得意がりて、己がなければ成らぬやうに思ひ居ると、既に時機一進して、後輩は之を面倒に思ひ、早く隱居せよかしと強迫すべし。元老院、樞密院、藩閥、老朽などの名を附して、折角の昔しの功の名は消て仕舞ふものなり、夫にも關せず、倘ほ強ひて舊功を誇らんとすれば、遂には身斥ぞけられ、家亡ぼさるるとあり。古しへより、功臣の大抵終を全くせざるは、此處の道理による。功とは、機に應じ時に適ひたる仕事なり。其仕事了れば時機一轉して再たび其功を要せざるものゆゑ、人が之を思はざるも當然のとにて、今更ら人を責めて之を記憶せよと迫るも野暮の事なり。但し、此の仕事を功と云ふときは、倘ほエラソウに聞ゆれども、實は、ホンノ、名に過ぎず、必竟、名目の事なり。人世の仕事大抵は名目に外ならず。喩ゑば、看版を下し叉上げて、名題を改たむる丈けの仕事を、功とは言ふとなり。功なるものの意義、眞とに之に過ぎずと知らば、倘更ら、人に誇

り人に驕るの價値はなきとにて、其の役の濟み次第早速隱居すべき筈なり。彼の役者を見よ。一つの藝當名題に夫々の役を擔當し、一幕一幕に入れ交はりて毫しも舊功に泥まざるにあらずや。然るに、前幕に主人公となりて、首尾能く演じ、看客の喝采を博したりとて、次の幕にも同一の裝ほひを爲し、不相變ブラ〳〵と出射張りたらば如何ん。名遂げて身退ぞくは即はち役者の道にあらずや。

◉不レ出レ戶知二天下一、不レ窺レ牖見二天道一、其出彌遠、知彌少。是以聖人不レ行而知、不レ見而名、不レ爲而成。

戶を出でずして天下を知り、牖を窺はずして天道を見る。其の出るは彌よ遠くして知ると彌よ少なしとかや。是を以て、聖人は行かずして知り、見ずして名づけ、爲さずして成ると。之れたゞ辭ばを美しく文を舞はして異樣に形容したる說にはあらず。茲ど實際に適ひ、人情を究めたるの教訓なり。人は局に當りて反つて暗く、傍目に八目の明あるとあり。燈臺の下は、明るきやうにて寧しろ影多く、之を遠方より見れば、燦として長光を引く。左れば、世に出でて世に奔走するものが尤とも世に精はしき譯なるに、其實、反つて迷へり。

彼の黨派の人が、銳敏至極の注意にて互ひに探究するとゆゑ政海の事は第一番に明るき筈なるに、局外より見れば、可笑しきほどに事情に暗きとあり。之れ局に當りて利害に迷ひ、自から盲めきて、眞相を見ざる故也。左れば、主婦たるもの常に家の門より出でざるゆゑに、天下の事に暗しと云ふと莫れ、天下の事は反つて閉戶先生の爲めに尤とも正當に解釋せらるゝとのあるものなり。昔しより、世騷ぎ、一代亂となれば、大抵は山の中に住ひし人が出で來りて之を救ふ。一家一門の大喧嘩となれば、平生世棄人となりて暮せし隱居連中が之を裁判す。これ超然として利害の外に立ち、其の眼迷はされずして、事物の實際を正當に見分くるとの出來るゆゑ也。故に、主婦は、外に出歩きて初めて世の事を知ると思ふ勿れ。戶を出でずして何ほ天下を知るとの出來るものなり。そは牖より首をさし出して一夜星を見つめ、而して後ち漸やく天道を見ると云ふにあらざる如し。天道は、爛として吾が胸頭心中にも映り居れり、閉目反省して之を見るとを得、何んぞ必らずしも窓より外を眺むるの要あらん、斯の如きあわて者は、外に出ると彌よ遠くして知ると彌よ少なし。只だ騷ぎ廻

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りたりとて、其の詮はなきことなり。是を以て、古の聖人たるものは、わざ〳〵行かずとも之を知るなり。わざ〳〵見ずとも其の形容名目を附することを得べし。行きて初めて見、見て初めて名を知るなどは、如何にも思慮の足らぬことなり。主婦は皆な聖人にあらねど、學ぶ所は皆な此にありたし、一々、外に出て交際し、而して後ち先方の人を知り、知りて而して後ち初めて扱かひ方を工夫するなどは、既に晩し。吾心より人の心を推し、吾家より人の家を推し、吾良人より人の良人を推し、吾欲する所と欲せざる所とを推して、人の欲する所ろ欲せざる所を推し、沈思閉目し、推考揣摩し、苦心研究し、經驗調査して、靜かに吾戸内の苦學より推究せば、天下天道の大事も大方は明白なるべし。反つて騒々しく世に走り廻りて、夫に溺るる人よりも正解を得ん也。すべて、此の道理にて、自から爲し、自から功を立てゝ、事を成就すると云ふは宜しからず。下女下男の善く爲せしとは、ツマリ吾が爲せしも同じとなり、良人の善く爲し玉ひしとは、ツマリ吾が爲せしと同じとなり。子供が善く爲せしとは、ツマリ吾が爲せしとも同じとなり。自から爲したる氣に見えず、自から爲さんの氣にもあらずして、而して其事の能く成就するを、眞に成就したりとは言ふ。之を爲さずして成るとは申す也。此は、戸を出でずして天下を知るの素養工夫に熟したる族が、能く爲す所にて、自から奔走せざれば不可なりなど思ふ類亞の騒々しき輩は、亦た自から爲したることならねば成就せしとは思はぬ氣なり。眞とに、淺々しきことと云ふべし。

◉太上、下不レ知レ有レ之、其次親レ之譽レ之、其次畏レ之、其次侮レ之、信不レ足焉有レ不レ信。猶兮、其貴レ言。功成事遂、百姓皆謂二我自然一。

太上は下、之あることを知らざる也。其次は、之に親しみ之を譽むる也。其次は之を畏るゝ也。其次は之を侮どる也。信足らずして信ぜざることあれば、猶として其れ言葉を貴くする也。功成り事遂げて百姓皆な云く我自らにして然りと。凡そ、親切の尤とも親切なる事は、人之を知らず。故に、親を評して親切なりと云ふものは殆んど稀なり。其の偶たま之あるものは、老年、吾子を持ちて、吾自らに經驗したる後の事なり。茲に、小さき娘あり、雨天に泥濘の道を行く。家の老媼、下駄の鼻緒の切れなんことを心配し、其の出がけに一應取調べて

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

緩ければ〆直し、弱ければ一本の緒を足して、穿かせしゆゑ、如何に泥中に沒して、屢ば引くり返りしとも、鼻緒は丈夫にて難なく家に歸る。此時、少女は何の氣もつかぬもの也。然るに、老媼に此の親切もなく、外に此の注意も仕てくれるものなければ、何所かの途中に、プッリト切れて、進退維れ谷まり、泣き出さん斗りに途方に暮しゝとき、長屋のお神さんが飛んで出で、之は〳〵お嬢サン、お氣の毒やと言ひて、藁三四本を呉れしゝば、漸やく家に歸る迄の用意を爲し、下駄の先きを拇指で支へて、跛の如くにして歸り來り、あの長屋のお神サンは實に親切な人だと言ふと也。されば、親切の名は得て、人に有がたがらるゝは、ずつと末の事にて、眞とに大親切を盡しつゝある人の事は、見もせず、聞えもせず、頓と知れずに過ぎ去るものぞ。之を大上々の慈愛と云ふ。故に、大上は、下、之あるとを知らずと申す。之あるとを知るは、其の次なり。之を知つて、其親切を謝し、其の愛心に懷き、其の仁惠を賞めると云ふが、先々第二段の事にて、之も何は可なれど、更に其次となれば、之を畏れ、之を恐る。更に其下となれば、之を侮どり、之を信ぜざるに至る。左れば、親の尤とも大慈ありて、其の教化薫育の尤とも功妙なるものに至れば、其の子たるもの、親のありなしを餘り氣にとめず、万事自から自由に處置して、すべて自からに然るものゝやうに感じつゝも、其結果着々として功を奏し、果して立派の子供となる、之れを大上とする也。其の次は、親に親しみ、親を賞め、親を以て此上なきものとし、無二のものとし、寸時も離るゝ能はず、聊さかも反くと能はずとなるやうなるが、善きとにて、所謂ゆる愛育を施こしたる結果は、大抵、斯の如くなるべし。其次は、八釜しく制裁し、規律的に訓練し、罰を與へ、叱りこらし、所謂ゆる威を以て敎ゆるの法にて、子たるもの之を畏るゝ也。之れ何ほ不可なし。其次に至ては、口に八釜しく言ひ乍ら、自分に其の德なく、子に嚴重に言ひ付け乍ら、自分の鬪鬧亂雜なる親は、子たるもの之を侮どり之を信ぜず。下の下なるものと云ふべし。左れば、吾が信足らずして人之を信ぜず、過ちは自分にあるものを、之をしも侮ほ氣が付かず、人の信ぜざるは、言ひ方の足らざりし故なりと理屈をつけて、更に猶今として言を立派にし、嚴そかに命令し、以て其の功を成さんとすとも、遂に其の詮はある可ら

ず。真に愚な者とこそ云ふべし。子を教ふるも、民を治むるも、同樣にて、昔し堯舜の時、自治政躰にて、民をして自由に發達せしめ、堯舜はよく大綱を提さげたり。其民、謳つて曰く、渴しては飲み、餓ては食ふ、帝の德、何んかあらんと斯樣に百姓皆な我自然に成就せりと思ふに至つて、政治の上乘と云ふべきか。母の子を教ふるも亦た斯の如くなるべし。言行不一致の母が只だ口サキ斗りにて八釜しく言ふは、下の下なり、侮らるゝ計りなり。たゞ究屈嚴重に教へて、繼母が繼子を育つる如きは、畏れらるゝと過ぎて、伸びりとせず。愛して育つるは、之に優りたると勿論なれど、其の愛の大愛、其慈しみも大慈にて、子をして獨立自治の心を失はしめず、只但だ親の力にて立つと思はしむるやうなるとなく、殆んど親あるとを忘れ、親の親切をも意識せざるに至らしむるが最上ならん。而して、此の事はたゞ子を教ふるの上のみならず、下女下男、奉公出入の人を使ふの上に於ても亦同じきとなり。主婦のあるとを覺らぬほどに、彼等をして自から活動せしむるが上の上なり、たとひよく主婦に服し、主婦を畏めたるとも、一々、主婦に聞かざれば出來ず、又、主婦の監督ありてそこに心を引〆めて隨事するやうにては、未だ妙とす可らず、其次は、畏れて目前のみ働らき風を見せるもの。其次は、侮どつて蔭で惡る口を言ひ、ナンノ相變らずの口八釜しい、何を言ふやら當になるもの乎と、信ぜざるに至ては、下の下なり。總て、此の段々の階級をよく心得て、上に上がある者と勘辨し、宜く理想を高くして、順次に苦學勉强すべしと云ふ。斯の如きが先づ老子女訓の說き方なり。

大磯だより

哄笑一番

湘烟女史

窓前は寒風肌に砭りする如くと聞くも、硝子を以て圍み盡くしたる廻はり椽、些の寒さを覺えず、滿背に太陽を浴びて長城と對語。昨夕親戚の某歸省し、東行の途次來泊、種々の田舍談をもたらす中、某の語りけらく、相變らずあの伯父爺は醉を以て鄉と爲すといふ境遇で、先夜も爺の孫娘が他より歸途、路上に人の臥するに驚き、近き見れば爺なり。娘は容赦なく起

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

サーお爺さん、一所に歸ろ。お爺さんよ、チーお爺さん。と呼び立るも、起きんとはせず。土かけておけ、土かけておけといふに、娘も困じ果、とてもおのれ一人にてはかなはじ、人を呼び來るより外なしと、去らんとして、不圖胸邊に財布のぶらさがりあるに心付、このまゝ去りしならば、あとにて通行人のこれを奪ひ去らぬともはかられず、若かずこれを取りおかんにはと、財布に手をかけるや、爺は孫娘とは別人の更に來りておのが財布を奪ふものなりと思惟し、手を以て之を制し、この財布は、この財布は、三途の川の渡し錢、これとられてはといひたりしと、大笑ひの話しありしと語るを聞き、吾はこの物語りのいかにもをかしきに、其夜枕に就きて後も獨り笑みを洩らしたりしが、今又吾は其話を繰返して、其爺さんが身邊に近きしものを、別人なりとして語りしとは、おのづから照應ありておもしろからずや。醉はずしてこれ程の興を催ふるものあれば、更に妙ならんなど、語る刹那、窓外を瞥見したる吾は、叫びたり。アレ牛が庭に來たといふより早く、吾が手は既に硝子戸を開きて居れり。見れば、家の赤犬が悠然と垣を入り來るなり。アー硝子が反射の作用かと、相顧みて、哄笑一番。

隨感

○黨の價値

黨を結ぶと云ふと、近頃の流行にて、凡そ何事か貫ぬかんと欲する族の、總じて黨の力に倚らんとせざるは稀なり。扨てこそ、黨の價値と云ふと、既に疑ひなきほどに人も思ふべけれど、其實頗ぶる怪しきことあり。黨の勢力は、空論の時に多くして、實行の時に少なく。平凡なる小是非の時にちとは效ありて、非凡なる大是非の時に大抵は害あり。古しへより、親を殺すものは、其子なり、親分を殺すものは、子分なり。敵國外患の邦家を危ふくするにあらず、忠義愛國の士なんど言はるゝ輩の反つて國を危ふくすると、同樣の理か。夫れ、黨を集めて、分に過たる名聲を博し、其の名聲の故に自から倒するの、大率ね然り。人も亦た痴情の奴なるかな。夫れ、黨の尼して來るは尚ほ可なり、黨を挿しにして進まんとする人の如何に拙なきぞ。刺客にして二人以上共もに來るは臆病

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ならば、左して憂ふるに足らず。犬のもろともに吠えかゝるは、吾に恐るれば也。暗中、孤り近づき、ソヨともさせで始末をつけるものは、人にせよ、犬にせよ、恐ろしきもの也。

○慷慨の價値

慷慨は、多少は公け事に關する心地より發する不平なれば、幾分、上品の色なきにあらず。况してや、歴史上種々の連感とありて、人々之を殊勝とするもあり。いつの世にも、何程か、氣受の善きは當然の事なれ。左れど、慷慨を重ね〳〵して宛がら其の專門の如く、自からも亦た之に安んじて、偏へに其種をあさるに至つては、寧しろ丈夫の恥なるべし。深入淺語なく、痛愛とも無言なり。眞とに慨歎禁じがたきもの〻、只管ら他を責めんとするのみは、受取りがたし。苟しくも、身を後事に托して、志を澄清に立てなば、己むを得ざるの不平を少しくは漏らして、同士同人の間に告ぐとも、別に根柢原泉の救ひに苦慮して、人知れぬ經綸に腸を搾らんの用意は莫る可らず。大道廢れて仁義の說あり、國病みて、愛國の說あり。只徒らに慷慨の聲を聞くときぞ、左して賴母しき

時節にはあらざるべし。

○立策の價値

慷慨の徒を拙なしと言ふ族の、まめだちて種々の經綸を言ふとあり、或ひは東方策の大よりして、對議會、對政府の奇策に至るまで、立案の才世の常ならず。人も大方は賛歎するなるべし。左れど、其の價値何程ぞと問ひて、少しく可笑しきとのあるものなり。凡そ、事の行はるゝは、案の善悪に關すると少なく、機會と人の手腕とに關はると多し。今ま、紙上の立策は誰の爲に案じ、何れの時に行はんとするか、果してもし今直ちに實行すべしと言はゞ、暫らく之を言はざるぞ策なれ、言はゞ大方は破るべければ也。左らば、紙上に陳列し、舌頭に吹聽するもろ〳〵の奇策は、抑も何の爲の廣告ぞ。憫れむべし、一代の奇才子、遂に見世物の興行方となる。

○價値の價値

價値なきもの即はち價値あり、何ぞ必らずしも一々、價値を問はんとすと言はんや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時事

同志社教授 博士森田久萬人先生

門人 青柳 猛

今日の學者なるもの、夫れ古のソフラ井ストに似たるか。我れはショウペンハウエルの奇論縱橫、魍魎を呼び風雲を叱咤するの概あるを愛す。然れども、自ら自殺の妙理を稱へ、寂滅の迎ふべきものなるを唱しながら、死を恐るゝこと、懦夫にまさり、或はピストルを枕にし、或は二階を避け、一たび痘瘡流行の故を以て、チエチベを去り、再び虎列剌の故を以て、伯林を避け、三たび遂に食物の故を以て、チーブルスを去れりといふに至りては、我れ亦其怯に笑はざるを得ず。今の讀書子なるもの、今の推考家なるもの、此くの如くにして、多くは、其行ふところ、其唱へ考ふるところに異る。歎ずべからずとせん耶。人性の弱點寧ろ恕すべくまた愛すべしと雖ども、古の學聖は決して然らず。其いふところ、常にその行ふところに合す。しかも、その叫ぶや、救民の大慈悲よりし、實相に觸れたるの止むを得ざるよりす。是に於てか、身命を擧げて、其所說に賭す、亦宜なる哉。ソクラテス、スピノザの儕なるもの、素より今日の學者輩と其撰を異にす。これ預言者なり傳道者なり。學者の眞ならんものは、須く此くの如くなるべし。故に以爲らく、我邦今日の學者は、夫れ辯理を好み談論を職とするソフ井ストならんかなど。故同志社教授博士森田久萬人先生は、古學聖の心をうけて、誠に學に忠に、其學ぶところ其考ふるところを實にせし人なり。曾て其敎室に出るや、我儕に敎へて曰く、『今日、人の信じて以て眞となすもの、明日また僞たるなきを保せず。故に漫りに事を斷言するが如きは、眞理に不忠なるものなり。されば、卿等、言をなすに當りて、輕忽に斷じて「そうです」といふ勿れ。必らず常に「そうでしょう」と云へ』と。而して、自から語るに當りてや『でしょう』の語を用ひて『です』『なり』などの言をなしこと殆んとこれあるなく、一事を說明し終る每に『つまりは、よく考へて見ると解りませんな』の語を以て、結べるに至りては、恐らく萬人の驚歎するところならん。不肖鈍愚の身を以てして、しかも眞善美と

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

人道とに些かの心を傾くるを得しもの、全く先生が熱實なる教化による。日本人が眞を說き善を說き、而して美を說くこと殆んどこれなきに慨し學生をして之を素むるの志を盛ならしめんとせる如きは、廿五年の頃に當りて先生の最も勉めたるところなり。今や同志社の危機に際して、しかも、未だ全く絕望することなく些か安ぜし所因のものは、先生のなほ止りてアトラスの如く、之を支へんとせしものあるを信じたればなり。客冬先生網膜炎に罹りて將に盲せんとするを聞き、痛恨の忍び難きものありしも、春陽來復の日自ら書して

田家烟

田のもよりうれしき烟たちにけり天つ御坐もにほひそめけむ

禮拜堂

同志社の鐘の音たかくきこゆなり神人一致　四海同胞

の二首を贈り給ひしを見て、心竊に之を悅びしが、二月廿三日俄然卒去の報に接し、深く受けし所の厚恩を拜謝し、同志社の前途之より益々望み少きを念ひ、我邦また古學聖の心ありし人一人を失ひしを悼む。時將に花笑はんとして、しかも、天下皆な秋の心あり。悲　哉。

宮城だより

馨　泉　女

⦿梅花　當地は他の寒國の如く、春の始も尙暖和ならず、流石諸木の兄、花魁と稱せらる梅花さへも、餘りの寒さに堅く口を結びて微笑だに漏らさず、四五月に至り、いやが上にも降り積りたる深雪名殘りなく融けて、山々の霞む頃、梅も櫻も海棠も桃も山吹も、皆等しく咲き匂ひ、春の錦の此時より始て人々の眼に映るなり。故に學童等に梅は花の魁なる事を說くも、其實例を擧ぐるによしなし。之等地にてはいづかたも皆斯くあることゝて敢て珍らしきことにはあらぬならめ。されど茲に一奇話あり、或東北人九州に至り、一夜談梅花のことに及びしに九州人問て曰く、當地にては十一月の末つ方か、十二月の始に至れば梅花大低綻び、南枝は多く見頃となれど、御地はいかにと云ひけるに、東北人呆れ顏にて答ひけらく、さても／＼暖地に似合はぬ、梅花の開期の遲さよ、我郷里に於ては四五月頃に至れば、梅花は勿論桃櫻までも共に滿開となるにさても／＼遲きことよと嘆聲を漏しぬ、なぞに落語なぞに似かよひていと興あり。

⦿花時　新年とし云へば都も鄙も異りなく、新粧を凝し、羽子よ、手毬と打集ひ樂むものと思ひしは、實に寒地見ぬ間の心なりけり。寒威凜烈積雪脛を沒するの寒國にては、暦を改め、御慶の禮を陳ぶるも、世間寂しく更に新年の心地せず、わらは此年の始旬餘を東京にて過し、此地に來りしに、春風はいつ吹き初めにけん其氣色だもなし。されど此地の花時の樂しく賑かなるは、都人の夢にだも知り給はぬ程にて、新調衣服も紅粉の粧も此時始て見かくるが如し、先つ都の新年と花時が同時に來りしと思ひ給はり大差なけん。

⦿五色筆　此地の名產の中にて名取川の埋木細工は人々のもてはやし給ふ所なれども、其外此國の特產に五色筆と云ふものあり。筆の命毛はさのみ長からず、つれの短きものなれど其軸は萩、葭、松、蘆(三角形の物)及蒲(片葉のもの)の五種にて作りいと雅致あり。去年の暮我親しき友に、此筆一箱贈りけるに、其友風雅の道をたどる人なりければ、特に嬉び、此年の初には松なるを用ゐ、夏は邪氣を避くる爲蓬を、秋は月影淸き學の窓のすさびに萩と蒲を、冬は樂しき雁の便の嬉ひを書く料には蘆こそよけれなぞさま／＼云ひ越しぬ。いづれの時たれ人のも

のしたるや知り侍られど、古より此筆に添へたる和歌あり、また知り給はぬ人々の爲に左にかいしるすになむ。

〇宮城野の萩筆

宮城野の萩の錦をかい集めふでに殘していく秋かみん、

〇名取川の靈筆

名取川瀬の埋木あらはれてはなさく藝の筆の軸かも、

〇末松山の緑筆

千歳經ん末のまつ山なみ越て筆にみどりの色そはりけり、

〇野田の玉川三角蘆筆

みちのくの野田の玉川名に愛しみすみのあしの筆の軸かも、

〇實方中將片葉の薄筆

世にあはぬ君ぞかしこきあらそひしかた葉の薄筆にのこして

因に曰ふ野崎左文翁のものせられたる日本名勝地誌に實方中將の墓の記ありよりて左に

◉實方中將の墓　愛島村鹽手の山畔に在り、按ずるに一條院の御宇中將實方行成卿を打ちたる罪に依て陸奥守に任じ、歌枕見て參れとて奥州の地に下向せられ阿古屋の松を尋ね、時に鹽竈明神の祟あり、實方に謂て曰く阿古屋の松は出羽國に在りと、實方依て出羽國に下りて松を尋ね、千歳山を經て歸れり、途上笠島の社前に至る、人に就て神の由來を聞き、是れ下品の女神なりとて例を破り馬より下らずして經行す、馬斃れ實方亦死し同じく社側に葬ると云々

後拾遺集　實方朝臣陸奥國に侍ける頃いひつかはしける

都には誰をか君におもひ出るみやこの人は君をこふらむ、　大江匡方朝臣

同じく返し

わすられぬ人の中には忘すれぬをまつらん人の中に待つやは、　藤原實方朝臣

山家集

朽もせぬ其名ばかりはとめ置て枯野の薄かたみとぞ見る、　西行法師

◉衣服　は總て質素にして倹約を守り、苟且にも奢侈ることなし、されど東京にて育ちたるわらはの眼には奇異の思を爲すこと少なからず、都にては無垢物の下には無垢の下着を襲ね、袷る裏には同地同色の裏の下着を着、花色裏には必ず花色裏の下着を用ふるものなるに、北地にてはかゝる規律なく、さまぐの色の裏地つきたる衣服を襲ね、多くは定りなきが如し又中より以下の婦女働く時はモヂリと云ふ筒袖の半天羽織を用ゐ、裳たかぐとかゝげ都にては夏衣にのみ爲す、紺絞の襦袢を顯し、頭には手拭を被り居れば、恰度銅身實の姿を見るが如し、下々の女子は冬に至れば四時の衣服を悉く襲ね着し、温かになるに從ひ上より一枚づゝ脱き去り最後の夏着は例の紺絞の襦袢なり、故に冬下婢を雇ひ入るれば、一包の褞袍だに持たず、空手にて來り、それにて四季事足るなり、頭に被る頭巾は手拭なれば、是にて頭巾と、手拭の兩用を兼ね、腰間袷なぞを用ゐる者は中にても稀なり、されば下婢なぞのごろ綻は當然と思はねばならぬなり、其他紺足袋流行し上中下なべて之を用ゐ女生徒の如きも皆紺足袋なり、なぜ紺足袋がよろしきやと問へばよごれが目立ぬ故と答ふ、倹德高しと賞むるが當なるか、無精不潔と云ふが適するか、其中と云ふこそ、適評ならめ。

◉宮城婦人會　去月十二日北一番町赤十字社内にて發會式を催し初に會頭千頭さく子氏開會の主意を陳べ、次に賛助員早川智寛氏清水層場氏の演述及柏村病院長の講話ありて終に役員撰擧を行へり、此日會する者百餘名頗る盛會なりし。同會發起人の姓名左の如し(イロハ順)。

入江ぬひえ(小學校教員)。早川てふ(妻)。錦戸とせん(妻)。千頭さく(妻)。渡　つれ(妻)。和達かれ(妻)。立花すゑ(妻)。長江あき(妻)。中山はるゑ(看護婦長)。永澤かふ(小學校教員)。村松たまき(妻)。野副さよ(妻)。大町てい(妻)。山田たけ(妻)。小泉うめ(妻)。坂　しま(妻)。里村なほ(妻)喜多見さき(師範學校教員)。嶺　ふき(妻)。下條たれ(妻)。庄子うた(寡婦)。白石つれよ(高等女學校教員)。師岡のぶ(妻)。清野わくり(妻)清水ひで(妻)

◉新刊書、雑誌の批評は余日なきに付次號に合せ載すべし。

片々

●下田歌子女史の自重心　女史中々功名心に厚きと同時に自重するも甚だし、平生談論を好むとも人を品評するに至つて稀れなり、左れば古今東西の人物を問はず容易に人物を是非せざるなり、女史の胸中天下の人なきや否やは知るべからざるもチト慢心に勝過ぎはせぬやと評する人あり、但し女史常に能く尊崇して措かざるは獨り税所篤子のみなりと。（報知新聞）

●三都婦人の氣風　三都に到る者は先づ其土地の風土習慣、人情の差違あるを目擊すると同時に、眼を一轉すれば又た婦人にも著しき固有の特所ある事を發見するなるべし、吾れ嘗て試に記して曰く

此を他の獸類を假り來りて譬ふれば東京は犬なり、大阪は猫なり、京都は兎なり、前者は快活なり、次の者は溫和なり、後の者は因循なり、快活は天眞爛熳を意味し、柔和は腹中聊か蓄藏する處を意味し、因循は二者此を發表し或は發意するなきを意味す

若し夫れ花木を以て此を分たば東京は梅なり、大阪は櫻なり、京都は海棠なり、梅は稜々として犯す可からざるの貞節を保ちて其神韻遠く、櫻は徒に爛熳灼爍として美にして艷、海棠は雨に惱むの愁容を持して艷にして雅なり

而して此を他の喰料品にて別たば、東京は氷砂糖の如く、大阪は黑砂糖の如く、京都は西洋砂糖の如し、第一のものは嚙めば嚙むほど其の甘味を覺ゆ、第二のものは嘗むると同時に其味のある處を悟り、第三のものは遂に何の甘味も厭味もなし」

更に此を人間の種族より比較すれば、京都は寧ろ貴族的なり、大阪は平民的なり、東京は貴族的にして更に平民的なり故に今一歩進めて動靜の上より言へば、京都は靜止せり、大阪と東京とは活動せり、前者は恰も大理石の如く其動くや機械的なり、後者は自動的に進んで動けり、然り而して其の動くや大阪は秩序的に動きて止まず、東京は不規則に動き、不規則に動かざる事あり「妾身不ㇾ許贖二千金一、妾身只許有ㇾ情人」なるもの實に東京の理想なり、故に彼等は容易に黄白などを以て情交を契らざる代りに、一旦盟約を遂ぐれば財產も將た身命も打忘れて唯一に意中の人の爲めに盡すの氣慨を有せり、若し大阪を以て此を言はゞ「誘ふ水あらばあれさ鑾かな」身を浮萍の根を絕えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふは實に彼等の性情なり、若し夫れ京都を以て此を言はゞ「うたゝれに戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき」なるものは彼等の觀念なり、靜に思ふて靜かに空想に懊惱しつゝ不言不語の間に自己が理想を埋沒し了はれる者は少くとも彼等の氣質なり」故に又た此を以て更に他の人に比較すれば京都は何にしら糸の淸き姬御前の如く大阪は此れに隨伴せる世辭も愛嬌もあるお守役の下婢の如く、東京は粹も無粹も嚙み分けたる仲居の如し

以上は唯だ其の理想に就て言ひしのみ、更に此れが理想を發現する外觀上よりして繰返せば、東京は意氣なり、粹なり、大阪は艷なり、麗なり、京都は優なり、美なり、前者に、瘦影赫顏の者多く、次の者は紅顏豊頰のものに富み、後者は白晳にして長方形の顏色に傾く、故に或は凜然として憎くらしきは東京、莞爾として愛らしきは大阪、整然として　いぢらしきは京都と云ふ事を得べし。（日本）

●新流行　此頃巴里にては犬に衣裳を着する事流行し、或は外套を着しめ或は靴を穿たしむる等奇麗を競ひて街頭に引連るゝを誇る由にて犬衣裳屋も數多開店さるゝに至れりと云ふ

●活花の競爭　近來活花の競爭其度を高め、古流、遠州、池の坊を各派競ふて會を催し、流義擴張を圖るよし。

●福澤翁　の女學論將に時事新報上に見えんとす。翁の息一太郞氏の序文に曰く、翁病中なほ女道論を獨語したりと。

●節酒と高等小學校の設立　野州鹽谷郡船生村にては村民申合せ祝義其他の集會又は新年等の酒を節し、其費用を蓄積して、高等小學校を設置す。

●女學雜誌　第四百八拾壹號、社說には海舟先生の日常、荒野の一人すまひなどありて家庭には紫琴女史の花園隨筆、櫻井鷗村氏の料理と國民などは吾人に感起を與ふる事殊に多し其他史傳としての日本武尊講義としての本邦救荒の來歷、雜錄としての馬陵生の紀元節の一生面、八淵蝌泉氏の評釋戀八卦桂居など讀むべきもの多々あり女學雜誌中の泰斗なる者といふべし。（和歌山新報）

●機業と婦女の勢力　當時伊勢崎織として世に廣まりたる品の最も盛大にして、產出高の多きは上州姬蓮剛志茂呂豊受の四ヶ村にして、其產額年々十二三万匹に及ぶ由、玆に最も奇なるは婦女子に勢力のあることこれなり、蓋し世に稱する上州の女房天下とは主として、以上四ヶ村內に於て見る所にして機業の盛大より起因せしものなるや疑なし、是等の村落は以前農耕を以て生活の最要務となし、婦女は唯手前遣の織物を織るの外他に生計を助くべき道なきを以て、自然男兒に屈服し我國の通慣たる男尊女卑の甚だしき地なりしが、機業の盛大に赴くに從ひ女子の手より働らき出す金額は、男子の鷄鳴を聞いて南畝に耕やし月を踏んで歸るの勞銀より夥多なるを以て、自づから農耕の業を賤み其結果として半農半商の業を執るに至りたるは、即ち婦女の生產に劣らの情態なり。明治卅年は同地機業の最も活勢を極はしたる時にして普通農家の婦女が一ヶ月働らき出したる織賃の最巧者十五圓より二十圓に至るの多額にして中巧のものにても十圓より十二三圓は僅かに働き出したるに相違なかりしなり。　昨年及び本年の如き聊か同地機業界に一種

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

の不味を呈したりとするも、一匹に付七八十錢より一圓の織賃を得ると雖がなれば、一ヶ月七匹を織り出すとするも五圓より七圓の金額を働らき出すものにして、遙かに男子の勞銀に優るを見る。現時世上一般不景氣を唱へ、殊に農家の如きは收入の程度較々定まりたるを以て、只管收出の度合ひを縮め其影響都府に及ぼすの今日、伊勢崎町の如き比較的各種商家の氣勢あるは、右農家に婦女の働らきと云ふ餘裕ありて、各市に比例して購買力の減小薄きが爲めなり、女房天下の跋扈茲に於て益々甚だしく、堂々たる且公も又如何にもする能はず、殊に十七八歳の婦女の如きは、生計の多分を助くるを以て其活潑なる男兒に讓らず、自然自活的の氣象を持し居れり。（報知新聞）

◉同志社事件　社員更迭し、社長辭職し、米國傳道會社と和睦し、綱領を復して、事件其局を結ばんとす。

◉郵便稅　四月一日より手紙四匁まで三錢、端書一錢五厘となる。

◉米國宗教は大小教派四十七、其内信徒最も多きものは天主教徒の八百卅九万五千百七十八人なり。前年よりは諸派總教二百万餘人の信徒を增加しあり。而して比較的增加の多數なるは、新藹国教を重んずるクリスチアン、サンエンチスト派、及び一夫多妻主義のモルモン宗なりといふ。

◎教育問題　頓に氣焰を增加し、小學校國庫補助決議案、貴、衆兩院を通す。教育家等、躍起となりて之に奔走したり。而して經濟論者は、之に反對の論をなす。

●女學家庭文壇雜爼（本誌〆切まで）

◉夫人の楽觀●下田歌子●跡見花蹊　報知新聞連載

◉家庭の栞　大坂毎日新聞連載
（子を持る母親へ◎日本料理、◎眉毛を濃くする事◎鼻の赤きを治する事
◎家事問答等）

◉家庭實務　國民新聞連載

◉紛靡錄（世の婦女子に寄す）　下野日々新聞二月十七日

◉先づ表面の醜態を慎む可し　時事新報二月十八日

◉萬朝紙上の女子論（卯田）　萬朝報二月十七日

◉婦女待遇に就て　大阪毎日新聞二月廿一日

◉天下縱横（老孃）
某女史に與ふ　京華日報二月十八日

◉家庭の爲　海南新聞連載

◉母の會の主旨に就き（湖涯子）　基督教新聞第八百十一號

◉縣下に於る女子教育（風來子）　信濃毎日新聞二月二日

◉日曜學校と正教婦人（望月桂林）　裏錦第七十六號

◉今後の女子國家に對する覺悟（白松園主人）　女鑑第百七十五號

時報

◎學事

●高等女學校の學科及程度　高等女學校令發布につき、文部大臣は、省令第七號を以て、高等女學校の學科及程度規則を發布したり。

明治三十二年勅令第三十一號高等女學校令第十二條に依り學科及其程度に關する規則を定むること左の如し

明治三十二年二月二十一日　文部大臣伯爵　樺山資紀

高等女學校の學科及其程度に關する規則

第一條　高等女學校の學科目は修身、國語、外國語、歴史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂、體操とす又隨意科目として教育、漢文、手藝の一科目若くは數科目を加ふることを得
外國語は之を缺き又生徒の志望に依り之を課せざることを得

第二條　教授日數は毎年大約四十週教授時間は毎週卅時以内とす

第三條　高等女學校の學科目の程度は左の如し

一修身　教育に關する　勅語の旨趣に基きて人道實踐の方法を授け兼て作法を授く▲修身を授くるには躬行實踐を旨とし務めて貞淑の徳を養ひ起居言動其宜きに適せしめんことを要す

二國語　初めは普通の漢字交り文を講讀せしめ漸く中古以降の平易にして雅馴なる文章及歌に及ぼし又日用書類記事文等を作らしめ兼て文法の大要を授く▲國語を授くるには發音及句讀に注意し讀方話方に習熟せしめ文章を作らしむるには簡明にして達意を旨とし文題は務めて實用に適するものを撰び文法は講讀作文教授の際其他便宜の場合に依て之を授くべし

三外國語　讀方譯解習字書取會話文法及作文を授け普通の文章を讀み及簡易なる會話及通信等を爲すことを得しむべし▲外國語を授くるには常に其發音を正しくし及文法に注意せしめんことを要す

四歴史　本邦建國の體制　皇統の無窮　歴代天皇の盛業忠孝貞淑の事蹟學術技藝の隆替風俗の變遷等に關する事項を授け兼て外國歴史の大要を授く▲歴史を授くるには我國體を明かにして以て國民たる志操を養成せんことを務むべし

五地理　本邦地理及本邦と重要の關係ある諸外國の地理を授け傍ら地文の大要を附説す▲地理を授くるには人生に適切なる事項を知らしむることを旨とし地文に於ては成るべく本邦の事實に依るべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

六數學　筆算に依りて整數分數小數の加減乘除並比例百分算を授け兼れて珠算に依りて加減乘除を授く又求積を授け及代數の初歩又は幾何の初歩を授くることを得▲算術を授くるには運算の方法及理由を理會せしめ日常適切の問題に就きて其應用に慣れしめ兼れて暗算速算に習熟せしむ

七理科　通常の物植動物鑛物の性質効用等を授け又物理上化學上重要なる事項を授け兼れて人身生理及衛生の大要を授く▲理科を授くるには實地の觀察に基き若くは標本模型圖畫及實驗等に依りて正確なる知識を得せしめ日常の生活及生業上に資せしめんことに注意すべし

八家事　衣食住看護育兒家計簿記其他一家の整理經濟衛生等に關する事項を授く▲家事を授くるには成るべく實習せしめ務めて實用に適せしめんことに注意すべし

九裁縫　運針法縫方裁方繕方を授く▲裁縫を授くるには實用を旨とし其技能に熟達せしむべし

十習字　楷書行書草書及假名を授く▲習字を授くるには字形端正にして運筆遲滯せざらんことを旨とし且普通文書の書方に習熟せしむべし

十一圖畫　實物摸型手本に就きて自在畫を授く▲圖畫を授くるには位置形狀濃淡等其宜きを得しむるとを旨とし時々自己の意匠を用ひて圖案を作らしめ又便宜彩色の法を授くべし

十二音樂　單音唱歌及復音唱歌を授く又便宜樂器用法を授く▲音樂を授くるには歌詞樂譜の高雅純正にして教育上裨益あるものに就きて練習せしむべし

十三體操　普通體操及遊戯を授く▲体操を授くるには精神を爽快にし身體を健康ならしめんことを務むべし

十四教育　教育の原則教授の方法等を授く

十五漢文　經史傳記等内平易にして雅馴なる文章を講讀せしむ

十六手藝　土地の情況に依り女子に適切なる手藝を授く

第四條　高等女學校令第九條に依り高等女學校に技藝專修科を置くときは其學科は第一條第一項の學科目中一科目若くは數科目を缺き技藝に屬する某科目を加ふるものとす但修身、國語、裁縫は之を缺くことを得ず

專攻科を置くときは其學科は第一條第一項の學科目中修身及國語以下の一科目若くは數科目とす

附　則

第五條　明治二十八年文部省令第一號は本令施行の日より之れを廢止す

●女子高等師範學校入學試驗　女子高等師範學校に於ては本年四月文科理科生各若干名試驗の上入學を許す由にて出願期日は三月十三日入學試驗科目は體格、國語（解釋、文法、作文）漢文、歷史（本邦、外國）地理（本邦、外國）數學（算術、幾何初歩）理科（博物、物理、化學）家事（衣食住裁縫）等にして志願者資格は師範學校女子部又は修業年限六ヶ年の官公立高等女學校卒業生或は之と同等の學力を有する者にして身体健全品行方正年齡十七年以上二十五年以下の者なりと。

●高等女學校の増設　從來東京府は一高等女學校の外有せざりしが、先般高等女學校令の發布せられしに依り、之れに應する設備をなし、時機を見て增設せんとて目下府廳に於て取調中なり。

●立教女學校　築地なる同校は新築落成と共に外人五名を招聘し別に隨意科を設けて日本畫挿花茶道薙刀等の教授をなす由寄宿舍は凡て日本風にして實地に就き家事禮法の教習をなすと

●女子高等師範學校の舞蹈　同校生徒の有志者は白井規矩郎氏を師として體操に唱歌音樂を配合したる一種の舞蹈を講習し居れり。而して此舞蹈は普通の舞蹈よりは體育に重きを置きたるものにして成効せる後は小學校の遊戯体操科に應用せんとするの意見なりと云ふ。

●女子職業學校生徒製品の天覽　神田一ツ橋通町の共立女子職業學校にては、是迄毎年一回天皇陛下より侍從を差遣はされ、生徒の製作品を叡覽に供すべき御沙汰を蒙り居りしが、昨春にも亦同樣の恩命に接せしを以て、常春早々より各科の生徒は競ふて〳〵其製作に從事し、去十五日右製作品を侍從職に差出せしに、天皇皇后兩陛下の叡覽あり右製作品中三十點だけ御留置相成りたりとぞ。

●校資募集幻燈會　橫濱市有志の設立に係る同市女學校は二月十三日より開校し目下三十餘名の入學生あり。本月よりは猶二十餘名の入校者ある筈にて、設立者は一層規模を擴張するため、種々盡力中なるが、今回同地有志婦人は同資金募集のため、三月四日午後七時より貿易會館にて演技幻燈會を催し、活人畫幻燈の外ヴアイオリン、獨吟、劍舞、曲箏などの餘興をなせる由。

●札幌高等女學校の設立　札幌區に高等女學校を設立するの議は、既に數年以來の事にして、殊に本年は札幌支廳に於て其豫算迄も調査して、凡そ一萬三千圓と概定したるに、適當財源を見出すの途なしとかにて、脆くも又々消滅の厄に罹らんとしたるが、今回政府は高等女學校令を發布され、而して本道は其經費を國庫より支出する規定なるより、區總代人中には道廳に交涉して、是非とも、本年中設立の運びを爲さしむべしとて、支廳長も又大に之に全意を表し居ると云へり。

●同志社女學校近況　生徒六十二名、内愛媛十一名、岡山十名、京都八名、大阪六名、愛知四名、山口三名、兵庫三名、他は一縣一二名宛なるあり。

●弘前女學校　は長谷川誠三氏の所有に屬し、全然ミツシヨンと關係を有せず。來春更に百五十人を容るゝ校舍を新築する計畫なりといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◉人事

●貞婦賞を受く

田村郡三春町士族赤松小太郎妻

マツ

明治廿六年嫁して小太郎の妻となる資性温厚一家爲に輯睦す偶夫の叔父狂疾に罹り專心之を看護す廿九年夫亦同症を發し躁狂常なきも孱弱の身を以て能く之に事へ其意を安するを以て念となす而して傍ら業務に勵精し家計を維持し以て今日に至る貞操一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金貳圓下賜候事

明治三十二年二月八日

福島縣知事正五位勳五等　山田春三

●女教師受賞　本所區中和尋常高等小學校訓導三好てる子は、東京府高等女學校の卒業生にして、廿六年十月以來一日の缺勤なく、職務に勉勵するを以て、松田東京市長より左の賞賜ありしと云。

東京市中和尋常高等小學校訓導　三好　てる

明治廿六年十月就職以來五ヶ年有餘一日の缺勤なく職務に精勵候に付爲其賞木杯一組並金五圓を附與す

明治卅二年一月

東京參事會　東京市長　松田　秀雄

尚ほ本所區學務委員よりは彰表狀に黑塗蒔繪硯箱一個を贈れり。

●慈善　野州三衣町酒造家三上源六郎一家數代前より、毎年新正月白米十五俵を貧民に分與するを以て、家例となす。當年も亦三升以上五升以下を袋に入れ雇人をして普く貧家に配布せしむ、貧民源三郎を視ること活佛の如し。

●美談一束　死を以て夫を諫む　京都市木屋町三條上人鈴木宇之助妻アイ(二十六)(京華日報二月廿二日)◉孝子　東京府南葛飾郡松江村農高石春藏(卅五)同妻アサ(卅二)(中央新聞三月二日)◉奇特なる妻女　神戸菲合久保房二郎妻ノブ(四十五)(國民新聞二月十七日)◉やさしき女教師　廣島外山郡加計尋常小學校女教員沖長ゆたの孝行(京華日報二月十九日)◉窮乏六ヶ年の貞操　福島縣三春町赤松小太郎妻マツ(卅)(國民新聞三月三日)◉清貧なる孝女　千葉縣飯野村今枝務次女ナカ(二十八)(同上)◉高知縣の貞婦　高知縣高岡郡上分山村枝川四森トラ(國民新聞二月廿二日)◉孝女　三河磯谷カチノ(十二)(宮崎新報二月十四日)◉孝貞夕ミカ事　宮城縣登米郡石森村字石森大畑勘四郎妻タミ(四十七)(國民新聞二月二十六日)◉貞婦孝子　廣島縣高田郡栗屋村字荒瀨伊藤源助の妻子(藝備日々新聞二月廿四日)

●知命の壽宴　故内閣書記官野口松陽先生の未亡人知命の壽宴は、去る廿六日令息寧齋氏並に島文學士(寧齋氏の令弟)が發起人となり、芝山内紅葉館に於て開かれたるが、巖谷一六、四岡宜軒、長尾雨山、本田口寧村、山東三栗、永坂石埭三十餘名相會し席上書畫の揮毫等あり、中々の盛會なりしと、因に云ふ寧齋氏の北堂は十九年前未亡人となりしより、克く勤に儉に客を待つと豐かに、自ら挙すると廉に頗る賢婦人の譽高き人なりとぞ。

◉會合

●秋田婦人教會例會　二月十日午後一時當市征原本誓寺に於て開かる。會員の參聽するもの二百餘名あり。第一席には師範校長槇山榮次氏の教育上に於ける婦人の職責に就て平易懇篤なる講話あり、第二席は征原貫軒師にて男女同權說非同權說を以て佛耶兩教を優劣視するの妄なるを述べ、幾多の經論に徴して佛教の男尊女卑說にあらざる所以を論じ、第三席に多田義觀師の法話ありたり。

●品川婦人教會　佛教により婦人の德性を養ひ必要なる文藝を授くる目的にて、三月五日より毎月一日講話をなし毎日曜に裁縫、編物、茶湯、活花作法、家政學習字、作文等を教授する由會場は品川北馬場正德寺内にて監督は平松理英氏。

●涌谷女子同窓會　宮城縣遠田郡涌谷小學校女子同窓會にては、二月十二日第二總會を開き、孝女柳田トラを招待したりといふ。

●伊豆伊藤婦人會例會　閑照子を會長とす同會は、毎月第二日曜日、其例會を開く。

●日本弘道會　婦人部にては二月十九日九段偕行社に於て會合を開き、辻新次氏の女子教育論ありたり。

●大日本婦人教育會　十八日の同會にて下田歌子氏、女子教育論の演說をなす。

●京橋區教育會と善行者表彰　二月廿六日京橋區教育會にては、同區議事堂に於いて、第七十三回總集會を開き、特に今回より京橋區内出身德行者の表彰式を擧行せしが、來會者殆んど場に滿ちて空席なく、先開會の辭に次いて教育勅語の捧讀あり、夫より事務報告を終り德行者表彰式は嚴かに擧行され、會長花房義質男の式辭、彰善會長高崎正風男の祝詞　三浦男爵の演說、南摩綱紀氏の祝詞等あり後役員の改選をなして、靜に散會せり、表彰されし人は貞節に於いて渡邊はな、戸川はまの兩女、孝養の旨にて松風光作、月村豐吉、藤木兼次郎、柴田幸三郎の四氏、忠勤には平岡清次郎氏、公益をすゝめし廉をもて平松芳三郎氏なり。

●福岡縣若松港婦人矯風會　福岡縣若松港の基教徒、有馬夫人、衣笠夫人等、發起となり、新に一の矯風會を起したり。

◉小林富次郎氏(府下著名の齒磨商店)は頃日夫人の長逝せられしに付諸方より香資寄附せられたるに對する返禮の虚式を廢し曉星園、神戸孤兒院、明治女學校の三ヶ所へ寄附金を贈られしよし也。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

憲政本黨々報

第七號要旨
三月五日發行

△論説△鐵道國有の建議に對する反對理由（尾崎行雄）選擧法改正意見（工藤行幹）政治家德操の腐敗（安部井磐根）曾國藩の志操一斑を記す（山田烈盛）柴原氏に代りて腐城君に答ふるの書（高橋秀臣）△政務資料△郵便條例改正案の通過（京染生）△雜錄△風土要論（志賀矧川）△新聞要覽△歳費增加に關する輿論△雜誌要覽△新刊紹介△詩（明湖）雜欄（外壓）△黨報△吾黨の二大刷新問題畧ほ決着す（政務刷新問題　黨制革新問題）外數十件△時事（數件）

發行日毎月二回（五日、二十日）

定價　一冊郵稅共拾錢○十二冊（六ヶ月分）前金壹圓拾錢○廿四冊（一ヶ年分）前金貳圓○郵券代用必す一割增

發行所　東京麴町區内幸町一ノ三　憲政本黨々報局

憲政黨々報

第壹卷　第七號

○論説○鐵道國有建議案（栗原亮一）韓に處するの道如何（野澤鷄一）東京政治學校の組織（松本君平）清國に於ける列國權力關係及救治策（中島多嘉吉）○○政務資料○○海關税の增加（齊藤文雄）露國東洋軍略（中井榮次郎）○○雜纂○○黨報○○時事○○外報

發行期日　五日　二十日

定價　一冊　十錢
十二冊（六ヶ月分）壹圓拾錢
二十四冊（一ヶ年分）貳圓

發行所　東京芝公園内　憲政黨黨報局

法政新誌

第十九號
二月二十日

●論説○戸水バリストルノ自由船自由物敵船敵物ノ諺○増島博士ノ刑事訴訟法ノ改正ヲ論ス○秋山法學士ノ國家ノ政治機關ニ對スル國際公法ノ拘束力ヲ論ス○王木法學士ノ保險契約ニ於ケル告知義務ヲ論ス○益田孝八ノ銀券發行ニ關スル意見○小木曾辯護士ノ檢事ノ附帶上訴ノ性質ヲ論ス○渡邊氏ノ豫算ノ裁可及公布ヲ論ス等孰モ法理深淵立論精確本誌特得ノ光彩ヲ放テリ

●法海拾珠○穗積博士ノ權利ノ觀念○本多ドクトルノ本訴ノ取下ガ反訴ニ及ボス效果ハ孰レモ得易カラザル法海ノ珠玉如何ニ我國光ヲ世界ニ炫燿セシカヲ見ルヘシ

●飜譯○高橋法學士ノ日清戦役國際公法ノ適用

●寄書○植松氏ノ官吏出張旅役ノ性質ニ佐々木氏ノ犯罪ノ主作的觀察ニ基ク新舊學派ノ論評等孰レモ立論正確タリ

●質疑　行政二問民法二問ノ解答ヲ收ム是レ學者好個ノ指南車

●紙上討論○山口國際法學者ノ國際私法問題一問○第九刑法問題ニ對スル討論ハ村山民外三氏ノ答案四編孰レモ氣焔萬丈異彩燦タリ

●問答○問題十一問、答案ニハ今野東晉氏外三氏ノ專攻ニ成レル卓拔ナル解題四件ヲ收ム

●判例　民事三件○刑事二件○行政二件是レ聽ニ銘スヘキモノ

●雜錄

●摘要　緊要記事數十件是レ必讀スヘキモノ

●新刊批評●校友消息●新刊書目

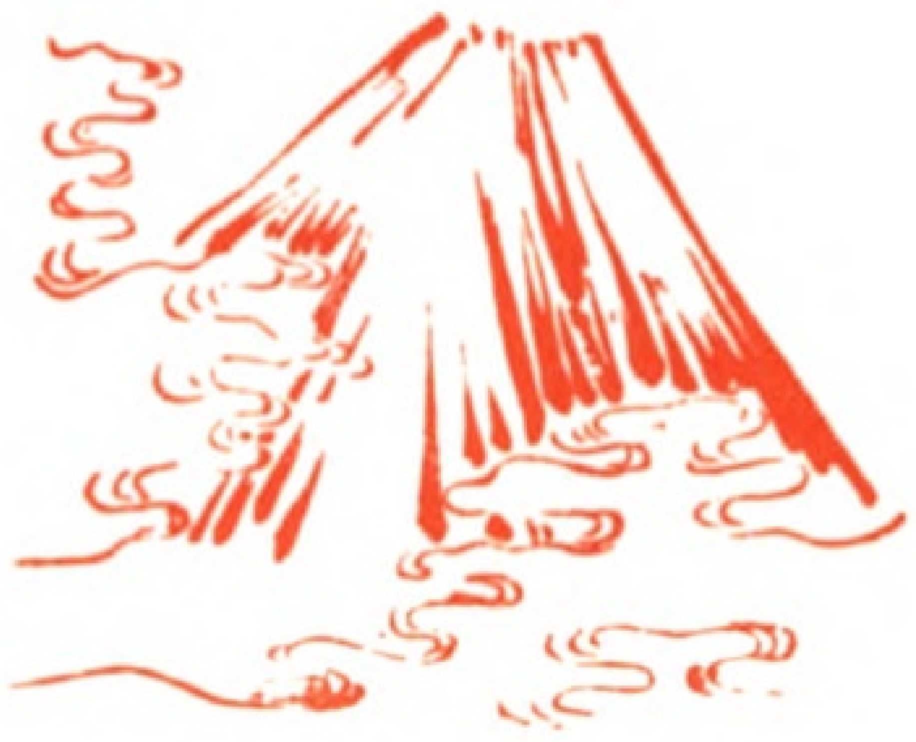
●注意　本誌毎月一回（廿日）發行○一冊前金拾錢六冊前金五十六錢、十二冊前金壹圓八錢外ニ郵稅一冊壹錢宛○爲替振込ハ神田一ツ橋通支局（宛名ハ法政學會）郵券代用一割增

發行所　神田三崎町　日本法律學校内　法政學會

發賣所　神田一ツ橋通有斐閣　仝裏神保町上田屋
仝　裏神保町明法堂

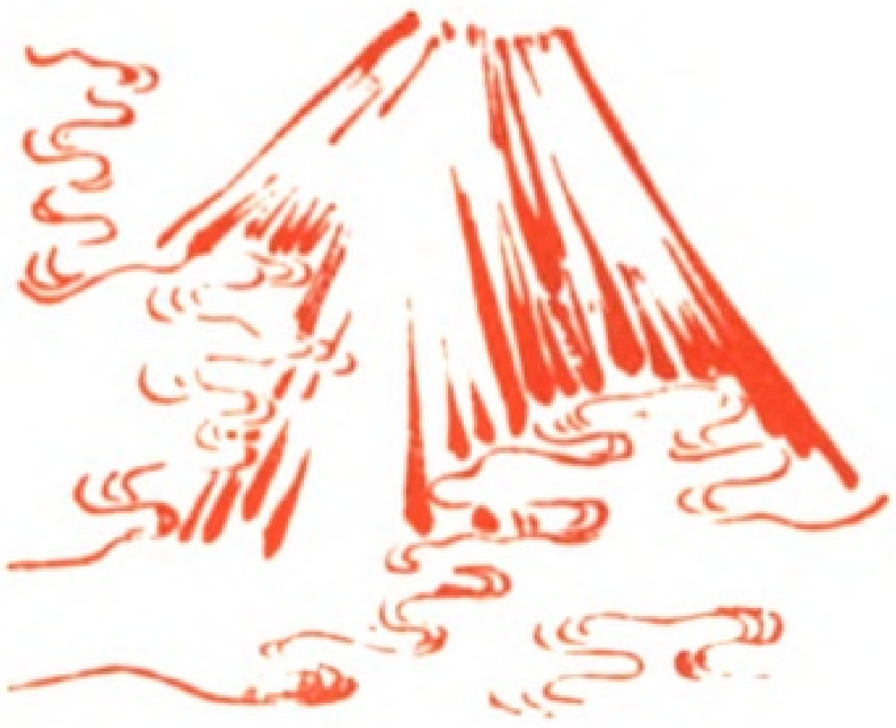
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可



(四八二)

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY